

研究紀要

第 11 号

1994

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大久保領家庵寺（第1段階）



西別府庵寺金草系（第4段階）
交叉鉢齒文縁軒丸瓦同范例1



金草窯 I (第3段階)



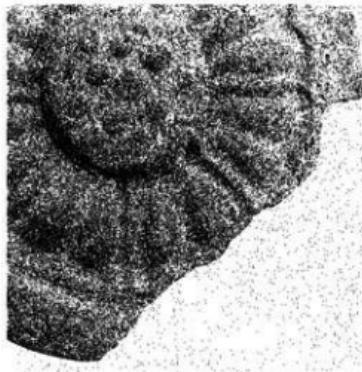
城戸野高寺 (第5段階)



西別府庵守西戸丸山系 (第2段階)



金草窯 I (第3段階)



毛樹原庵寺 (第3段階)

9



金草窯 II (第4段階)

5

交叉鉛文縁軒丸瓦同范例(2)

目 次

序

方形周溝墓と土器 I

福田 聖 1

埼玉県におけるカマド導入期の様相

—カマド、大型甑、壺の形態を中心として—

末木 啓介 55

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会

田中 広明 83

末野窯跡群産須恵器の胎土と生産

—流通に関する基礎事項—

岩田 明広 117

瓦当範の移動と改範とその背景

—武藏・上野に分布する交叉鋸歯文縁軒丸瓦の変遷から—

酒井 清治 145

埼玉県における古墳関連碑文

大谷 徹 163

新羅・伽耶における横穴式石室の展開

—慶州・陜川を中心にして—

岡本 健一 187

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会(1)

田中 広明

要約 古代における流通を探るため、関東地方の平安時代の遺跡からまま発見される緑釉・灰釉陶器について、網羅的に集成し、分布論的な考察を試みた。その結果、施釉陶器を比較的豊富に出土する遺跡では、4つの消費形態を確認することができた。

また猿投窯群第V期の製品の流通が、甘柏山遺跡群や櫛現後遺跡の分析を通じ、本来は重ね挽や一括の状態で流通したであろうことが予測された。

さらに施釉陶器の消費量の違いから、国府の消費、施釉陶器の豊富な遺跡の消費、1・2点程度の遺跡、無出土の遺跡が存在したことが、実数で明らかになった。これらが、平安時代の在地のネットワークと国府間交易、さらに宗教的なネットワークによって流通したであろうことを予測した。

はじめに

上野国との国境に近い武藏国の加美郡の中掘遺跡で、大量の緑釉・灰釉陶器が出土してから凡そ20年が経つ。これは関越自動車道の建設にかかる調査で出土したものであるが、再び平成3年から約4年間、調節池にかかる発掘調査が行われた。筆者は、この調査に携われ「この遺跡はこれまで調査したどの遺跡よりも施釉陶器が豊富で、他の遺跡と世界が違う」とまで実感した。

調査を進めながら、関東地方の施釉陶器の消費の実態は、果たしてどの程度なのか、基礎的なデータを知っておく必要に迫られた。本稿はこの第一義的な目的のもと、主に分布と出土遺跡の関連から、さしたる消費地でもない関東の消費の実態を探り、古代的な流通の特質を解明すべく稿を起こした。

ところで関東地方の発掘調査報告書の考察や、古代の遺跡と土器の性格を論じた論文で施釉陶器が多く出土すると、対象の遺跡に官衙や寺院等の性格を付与したり、東山道など官道との関連性を強調する傾向がある。それは関東・東北地方の平安時代の遺跡では、緑釉陶器はおろか灰釉陶器すら出土することが希なためである。遺跡からの出土の希少性が、果たして歴史的な価値判断を鈍らせていないだろうか。

このように施釉陶器には、経験測的な一般論として、具体的な検証を経ずに信じられている事柄がある。

- ① 施釉陶器の出土する遺跡は、国府・郡家・郷家・寺院・駅、その他官的施設と何らかの関連性を持つ集落である。
- ② 灰釉陶器は、貴重品であり日常雑器ではない。
- ③ 施釉陶器は、仏器等を写していることから祭祀的な遺物である。
- ④ 施釉陶器は、甚だしく伝世する。

等は、その好例である。この他にも問題点は多く存在するが、本稿では、遺跡に残された痕跡としての分布論・機能（使用目的）論からこの一般論を検証し、平安時代の東国の流通形態の一側面を探ることを目的としたい。

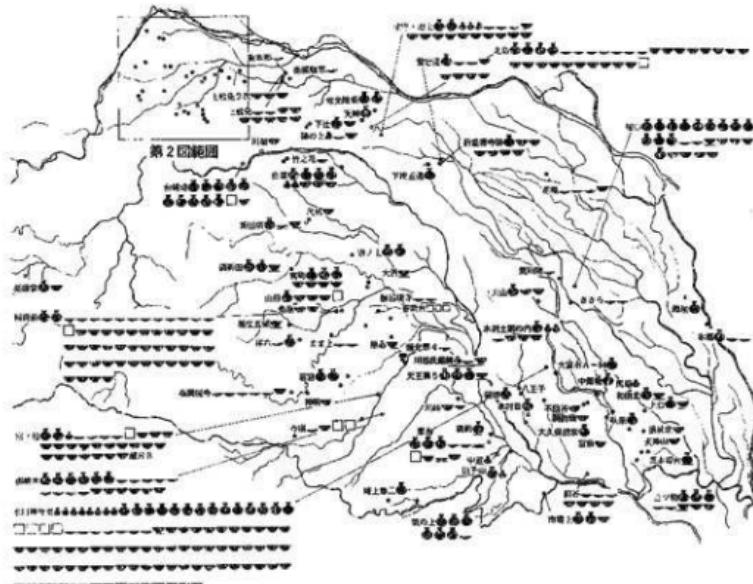
なお関東地方は、施釉陶器の生産地ではないため技術的な型式学的検討を、また都城のように定点資料となるものに恵まれないため年代学的な検討が困難である。これらはこれまで蓄積されてきた研究に全面的に依拠することとする（註1）。

I 関東4県の施釉陶器の出土状況

関東地方にどの程度の施釉陶器が、流通したか二つの方法から考える。一つは、代表的な遺跡を抽出し、須恵器・土師器との相対的な量比を測る方法である（註2）。もう一つは、関東各地の発掘調査例から網羅的に施釉陶器の出土例を調べ上げ、具体的な消費地図を作ることである。この二つの方法を両輪として回転させることで、より流通の実態に迫ると考えている。

次に関東4県（埼玉県・千葉県・栃木県・茨城県）の具体例を検討することとする。

埼玉県 埼玉県では、浅野晴樹氏による施釉陶器の先駆的な研究によって、その概要がまとめられている（浅野1980）。浅野氏は、折戸53窯式の灰釉陶器が、「東濃諸窯の灰釉陶器商圈」を通じ埼玉



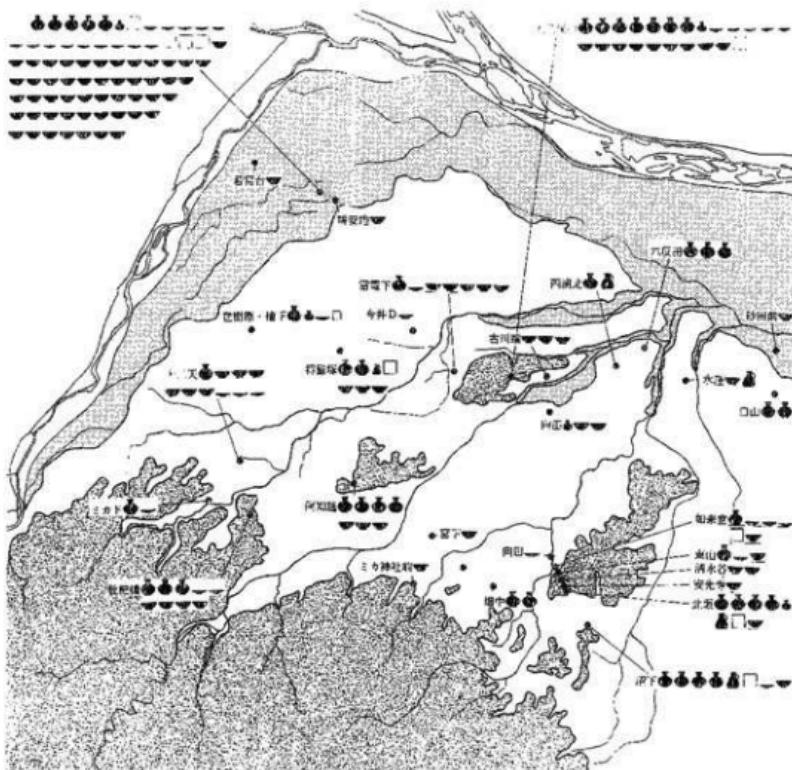
第1図 埼玉県内出土の施釉陶器(1) (枠内は第2回範囲)

北部へ東山道を経由し流通したこと。同時期の埼玉南部以南では、猿投・三河・湖西等の東海諸窯の製品が流通したこと。しかも黒窓14窯式・90窯式期の製品や綠釉綠彩陶器・三彩陶器・綠釉陶器は、官衙・寺院等に供給されていたこと等を明らかにされた。

その後、十年以上を経過したが、今回の集成作業を通じてもその傾向は、大きく変わらない。ただ調査例の増加が、遺跡の内容による消費の相違を一層浮き彫らせただけである。

比較的古い段階（黒窓14窯式以前）では、長頸瓶の出土が圧倒的に多く、新しい段階では碗・皿類が多く見られる。相対的に施釉陶器が、豊富に出土する遺跡として、かつては上里町中堀遺跡だけだったが、行田市池守池上遺跡・熊谷市北島遺跡・蓮田市椿山遺跡・坂戸市稻荷前遺跡・狭山市宮ノ越遺跡・同市揚幡木遺跡・大宮市氷川神社東遺跡などが調査されている。

また小規模な調査面積ながら比較的多くの施釉陶器の出土している遺跡として、本庄市大久保山



第2図 埼玉県内（児玉地方）出土の施釉陶器(2)

遺跡・児玉町電下遺跡・同町十二天遺跡・美里町如來堂遺跡・同町東山遺跡・寄居町北坂遺跡・同町沼下遺跡・行田市愛宕通遺跡・深谷市上敷免遺跡・川本町白草遺跡・坂戸市宮町遺跡・戸田市前谷遺跡・鳩ヶ谷市三ツ和遺跡・富士見市東台遺跡・所沢市東の上遺跡等が調査されている。

このほか埼玉県の場合、比較的小規模な集落でも灰釉陶器の1・2点は確認できるようである。

千葉県 千葉県では、房総半島南部の山地部を除き、満遍なく灰釉陶器が出土する。とくに千葉・市原市周辺や成田・佐倉市周辺では、開発に伴う発掘調査の報告例が多い。

施釉陶器の豊富な遺跡としては、袖ヶ浦市萩の原遺跡や同市永吉台遺跡、あるいは国府に開闢した市川市下総國分遺跡や市原市稻荷台遺跡などがある。ただし下總國分遺跡は、調査面積が小さいことや、稻荷台遺跡はその実態が未報告なため、ここでは分析の対象外とする。

前述ほどではないが、20点前後の施釉陶器の出土した遺跡として、袖ヶ浦市本郷台遺跡・八千代市白幡前遺跡・佐倉市江原台遺跡・芝山町小原子遺跡・東金市久我台遺跡・千葉市有吉遺跡・同市高沢遺跡・成田市開護台遺跡等を上げることができる。

千葉県の場合も埼玉県同様、比較的小規模な集落でも1・2点の灰釉陶器が確認できる。

栃木県 下野国府・下野国分寺・日光男体山に大量の施釉陶器の出土が報告されている。やや出土量は少ないが、小山市八幡根東遺跡や同市溜ノ台遺跡・上三川町多功南原遺跡・佐野市館之前遺跡などで一定量の出土がみられる。他は、十数箇所の遺跡で1・2点程度の出土である。

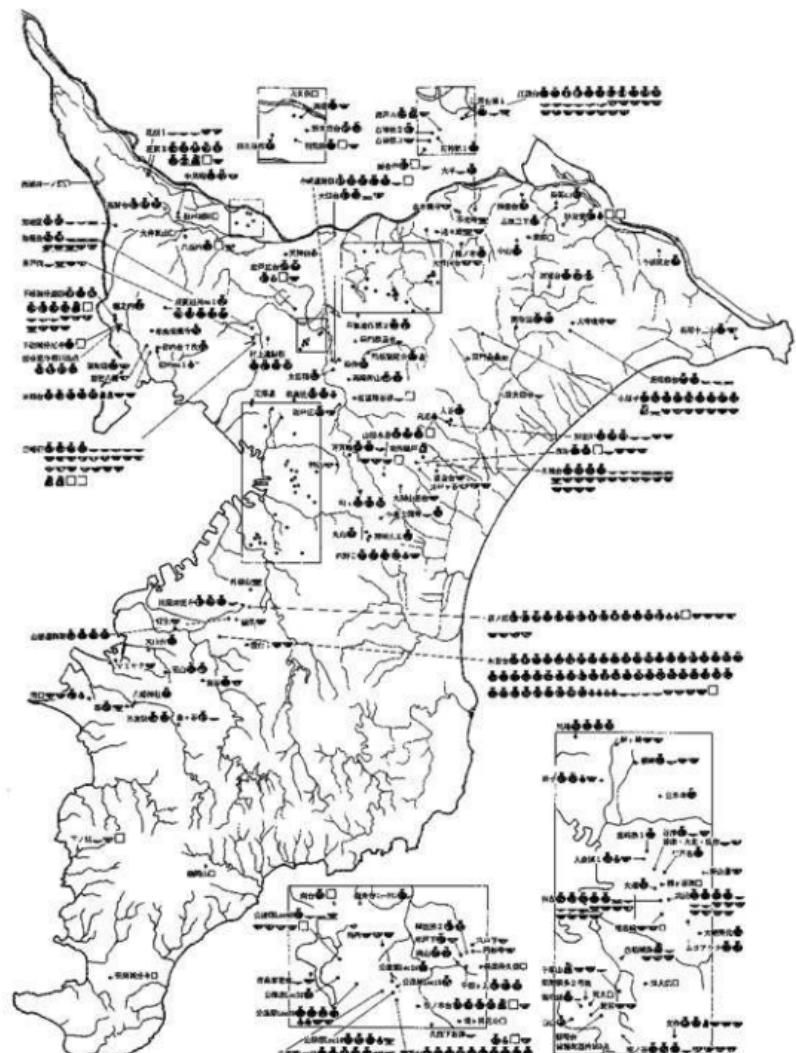
茨城県 茨城県では、大量に灰釉陶器の出土する遺跡は、報告されていない。霞ヶ浦に臨む地域の遺跡で数点ずつ出土しているだけである。なお茨城県内の施釉陶器の集成は、梶内氏が行っている(梶内1992)(註3)。

また隣県の例としては、三浦京子氏(三浦1988)(註4)、綿貫邦夫・神谷佳明・桜岡正信氏(綿貫・神谷・桜岡1992)(註5)が、群馬県の出土例を分析されている。また原明芳氏が、長野県の出土例を分析されている(原1994)(註6)。

以上が、関東4県の施釉陶器の出土状況である。これを踏まえ、従来感覚的であった施釉陶器の県別の消費量(出土量比)を具体的な数値で示した(第1表)。現状(1993年報告まで)の発掘出土

第1表 施釉陶器の県別消費量

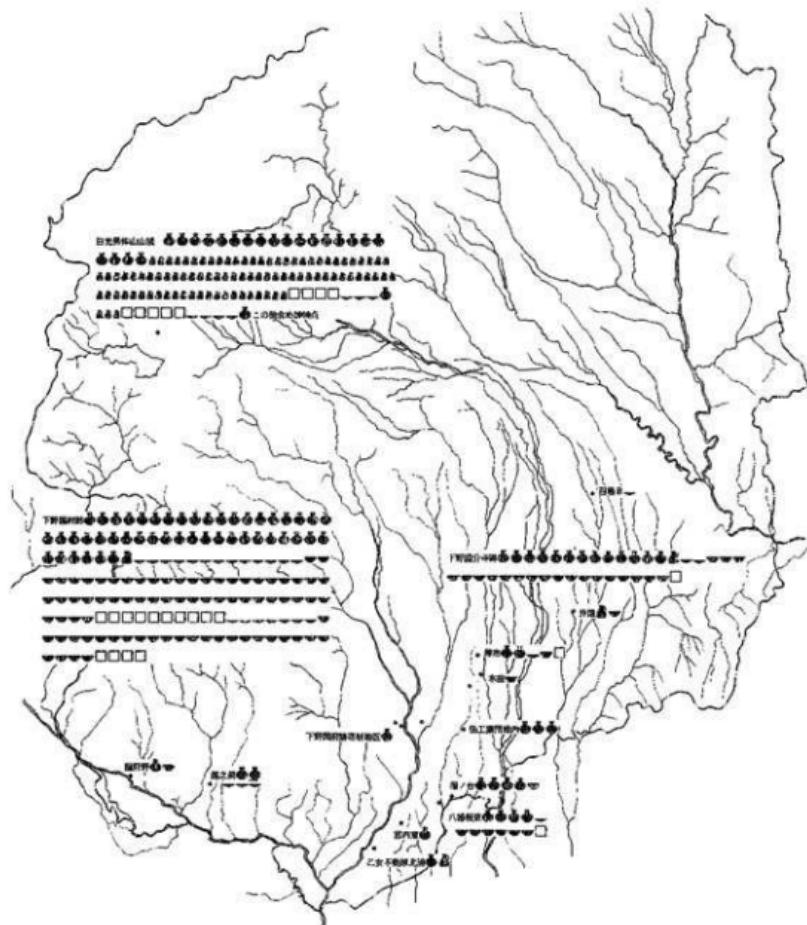
	埼玉	千葉	茨城	栃木
日本考古学協会会員数 (A)	195	167	68	62
埼玉を1とした協会員数 (a)	1.00	0.856	0.349	0.318
奈良時代の県別人口 (B)	238,154	254,747	238,154	99,820
埼玉を1とした人口比 (b)	1.00	2.894	2.706	1.134
施釉陶器の出土数 (C)	670	632	37	76
埼玉を1とした調整出土量 (c = C/a)	670	739	106	239
人口比率を考慮した調整出土量 (c × b)	670	2,139	287	271
埼玉を1とした調整出土量比	1.00	3.19	0.43	0.40



第3図 千葉県内出土の施釉陶器

資料のうち、報告されている奈良・平安時代の施釉陶器を網羅的に集成し、各県ごとの調査件数によるばらつきを古代の予想人口等で修正し、流通した遺物の相対的な量比を推定した（註7）。

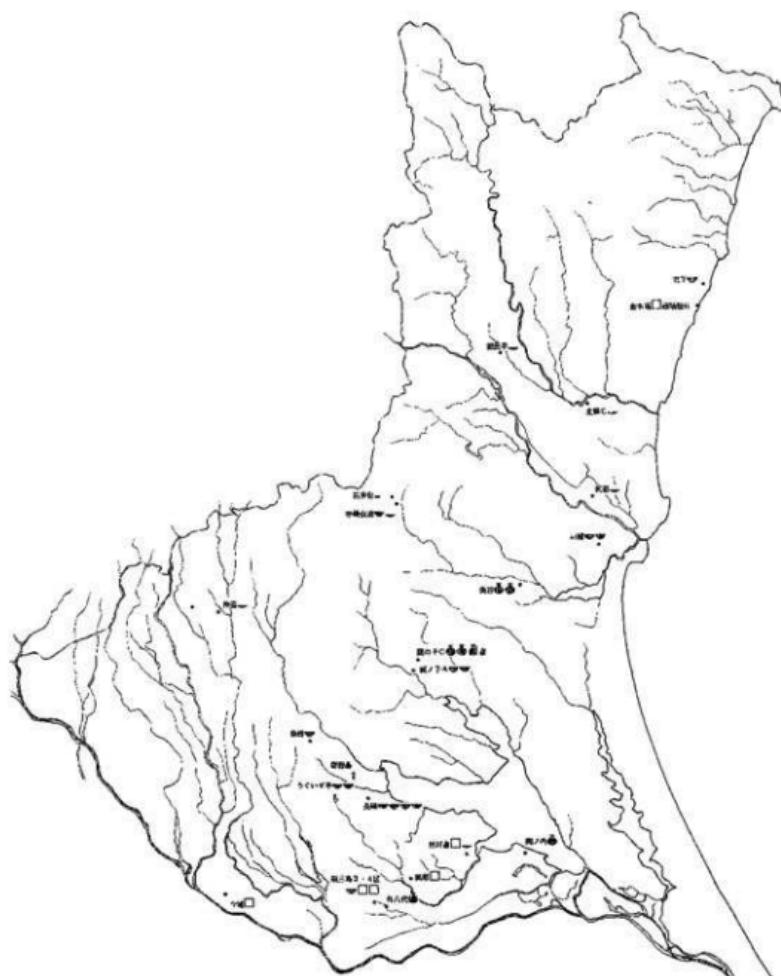
算定方法にやや問題も残るが、未調査資料も推定した統計上の傾向である。これによると千葉県は、埼玉県の実に3.19倍もの施釉陶器が消費され、また栃木県と茨城県は、埼玉県の消費量の4割に過ぎない（栃木県の下野国府と日光男体山の出土例は、除いている（註8））。少なくとも関東4県の県別の灰釉陶器の「一般の集落」における消費量（流通量）が、生産地との地理的距離によって漸移的に少なくなくなっていたことを追証している。



第4図 栃木県内出土の施釉陶器

II 施釉陶器の出土量と遺跡の特質

平安時代初頭以来、いわゆる集落の抽象的一般化、「一般の集落」を示すことは難しい。それは平安時代に入ると、郡家や寺院あるいは官道などと共に、再編成された「計画村落」（直木1965・高橋1979）（註9）に代表される奈良時代的な集落は消滅し、荘園や勅旨田、国衙領などの大土地所有制



第5図 茨城県内出土の施釉陶器

に伴う再編成が行われ、山野には個別分散的な小規模開発が進展したためである。國府や特殊な宗教遺跡を除いても、施釉陶器の消費量の格差が、「一般の集落」の具体化のむずかしさを反映している。そこで関東4県で豊富に施釉陶器が出土している遺跡を分析し、施釉陶器の消費形態を推定することとする。

中堀遺跡 上里町の中堀遺跡では、関越自動車道に伴う調査で竪穴式住居跡が、8軒調査されている。長頸瓶5・小瓶2・椀31・皿31・平瓶1・耳皿2の灰釉陶器の他、綠釉陶器の椀2・皿2・香炉等が出土している(埼玉県教委1978)。平成3年度から当事業団が、御陣場川調節池に伴ない隣接地の発掘調査を行っており、大量の施釉陶器が出土している(註10)。

綠釉陶器の出土量は関東屈指であり、灰釉陶器も含め窯業製品全体に占める施釉陶器の比率が高い。東京都府中市(武藏國府)や神奈川県平塚市の四之宮遺跡群(相模國府)に比肩する。

具体的な中堀遺跡の分析は、整理作業を行っておらず早計だが、調査者の一人としてこの遺跡は、「国家あるは国司が関与し、強力に編成した集落で、寺院や「館」あるいは政務機関を含む経営体」であると考えている。

中堀遺跡で綠釉・灰釉陶器とも、椀・皿・段皿・耳皿類が多く、特殊な器種として手付瓶・香炉・三足盤等が消費されている。製品は、黒錆14窯式からみられるが、大多数は折戸53窯式期の東濃の製品である。

北島遺跡 熊谷市北島遺跡では、昭和61年以来、継続的に調査が続けられ、6世紀から10世紀にかけての大形掘立柱建物を含む集落が調査されている。第4地点の2間×8間二面庇付建物は、9世紀の前半である。調査面積が狭いため建物配列は不明確だが、官衙政府の「コ」の字形配置ではない。隣接する大形の竪穴式住居を付属施設「厨」とした、いわゆる「館」であった可能性がある。

施釉陶器は、長頸瓶4・皿7・椀18などの灰釉陶器の他、数点の綠釉陶器が出土している。やはり椀・皿が主体である。全て竪穴式住居や溝・土壙などから出土している。とくに小形の掘立柱建物群の集中する第10・13地点では、この建物群の区画溝とも考えられる3号溝から折戸53窯式の灰釉陶器椀・皿・長頸瓶等と共に、大形の甕が破碎された状態で出土している。

墨書き土器には、「南家」「南」「田」「宅(常光院遺跡)」等がある。古代の開発と関係した中心的施設が考えられる。これらから北島遺跡への施釉陶器の流通の背景に、古代の開発とこれを主導し「館」を営んだ者を推定できよう。

稻荷前遺跡(A区) 坂戸市入西遺跡群の稻荷前遺跡(A区)は、6世紀の末葉から10世紀の前葉にかけて営まれた集落である。稻荷前第XIII期(9世紀後葉)に、3×3間純柱四面庇付建物を中心とした掘立柱建物群と竪穴式住居群から編成される集落が出現する。この建物群について報告者の富田和夫氏は、寺院的な色彩が薄く「在地で成長してきた富豪層の居宅」とされている(埼玉県埋文事業団1992)。

100点を超える施釉陶器(破片資料含む)が、各竪穴式住居から出土している。光ヶ丘1窯式から丸石1窯式まで存在する。長頸瓶2・皿10・段皿2・椀40が、報告されている。施釉陶器で圧倒的に椀・皿類が多いのは、稻荷前XIII期の建物群と関係した消費形態を想定しておく必要があろう。

池守・池上遺跡 行田市の池守・池上遺跡では、明確な竪穴式住居は確認されていない。規則性の

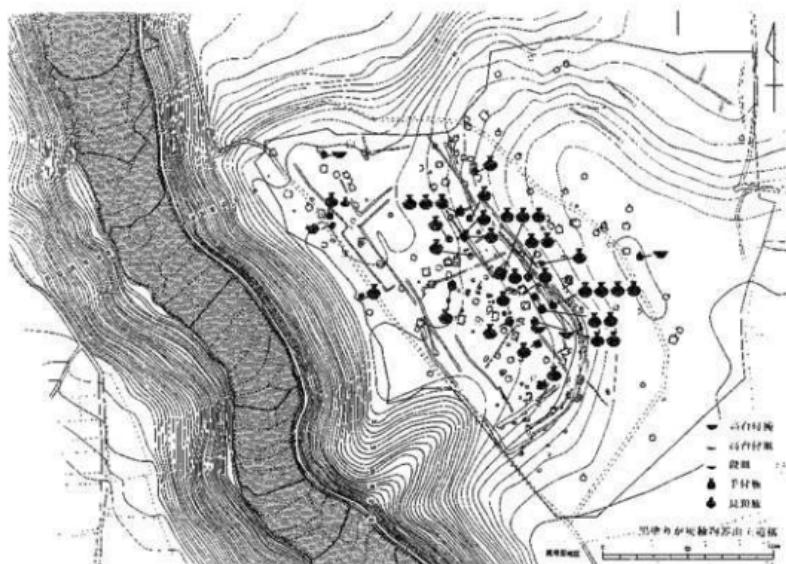
ある配置の掘立柱建物群や溝・土塁から比較的まとまった施釉陶器が出土している（埼玉県教委1984）。報告書によるとこの遺跡は、9世紀中葉から10世紀中葉に営まれた遺跡とされている。施釉陶器は、長頸瓶2・小形長頸瓶2・皿3・椀9の灰釉陶器の他、綠釉陶器の稜碗・椀が出土している。

池守・池上遺跡からは、「□西」「西」「西口」「中」「前」などの墨書き土器が出土している。報告書では、「前」を埼玉郡あるいは埼玉郷、「中」「西」を「付近の条里制を示す地名」とされている。しかしこれらの墨書き土器は、整然とした建物の配列や溝・土塁などから以下のように考えられる。

東大寺横江莊である石川県金沢市上荒屋遺跡（註11）や『上野國交替実録帳』等の例をみると、莊園や国衙領等の税の収集場所や貢納物等の倉庫群などの建物群は、配列に応じて方位や前後・数字などの位置名称で呼ばれていたらしい。池守・池上遺跡の墨書き土器も、同様に理解できるならば、無名の莊園や国衙領のそうした施設の一部であった可能性もある。

永吉台遺跡群 袖ヶ浦市の永吉台遺跡群は、萩の原廃寺や川原井廃寺等とともに、小櫃川の支流である松川流域に点在する遺跡群である。これらの古代寺院は、永吉台遺跡群の遠寺原廃寺とともに須田勉氏のいう「村落内寺院」にあたる（須田1985）。

萩の原廃寺や川原井廃寺等からも施釉陶器は出土している。永吉台遺跡群は、とくに長頸瓶が多く報告されている。破片からの復元資料が多いが、実に52個もの長頸瓶が出土している。他には、小形長頸瓶4・皿4・椀4が出土している。そのうち竪穴式住居を主体とした西寺原地区では、長



第6図 永吉台遺跡群の施釉陶器

頸瓶32・小形長頸瓶1・皿4・椀2が、また「村落内寺院」と竪穴式住居群からなる遠寺原地区では、長頸瓶20・小形長頸瓶3・椀2・短頸壺1が出土している。

西寺原地区の台地下段の斜面下に集中する土器焼成遺構群や竪穴式住居からも長頸瓶が出土している。また遠寺原地区では、「村落内寺院」やその周囲は比較的施釉陶器が少なく、やや離れた竪穴式住居群から出土する傾向がある。西寺原地区的集落は、土採り穴や焼土遺構から土器生産を盛んに行なっていたと考えられる。

ところで灰釉陶器の長頸瓶をこれほど消費する集落は、他にはまずみられない。この土器生産のみが、短絡的に長頸瓶を欲したのではあるまい。近隣の萩の原廬寺が、同様の出土傾向を示すことから、松川流域に展開する宗教的活動とこれを支えた手工業生産者が、何らかの生産活動、あるいは宗教的行動上の必要性から液体の貯蔵を目的として欲したのであろう。

萩の原廬寺 袖ヶ浦市萩の原廬寺は、前述のように永吉台遺跡群に隣接した「村落内寺院」とされる遺跡である。施釉陶器は、長頸瓶14・小形長頸瓶2・淨瓶・椀8が出土している。報告書による施釉陶器は、調査区北側の2×3間三面庇付掘立柱建物と竪穴式住居群の周囲に集中して出土している。

日光男体山山頂遺跡 日光二荒山太郎山神社社殿奥の西方の石の隙間から一括して出土した遺物の中に、約2000点にも及ぶ大量の灰釉陶器と、少量の綠釉陶器があった。圧倒的に灰釉陶器の小瓶が多く、88点が図化されていることが目を引く。他に長頸瓶21・皿3等が図化されている。二荒山は、奈良時代の末に勝道上人によって開かれた仏教の靈場で、国内の「知識」が集中したらしい。

氷川神社東他遺跡 大宮市の県立大宮公園内の氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡では、竪穴式住居跡41軒・掘立柱建物42棟等が確認されている。とくに並立する3×3間総柱建物について渡辺正人氏は、「陰陽師の居宅」と結論づけられている（大宮市1993）。

施釉陶器は、細片まで図化されている。灰釉陶器では、小形長頸瓶8・長頸瓶14・皿7・椀69・三足盤1・耳皿1・淨瓶など、綠釉陶器では、椀・皿類がみられる。黒篋90窓式から折戸53窓式段階までの製品と考えられる。

墨書き土器「上寺」や耳皿・三足盤・淨瓶・油付着土器、あるいは小金銅仏「如来立像」などが出土しており、宗教的色彩は強い。「陰陽師」はともかく、武藏国一の宮である氷川神社に隣接し、油煙付着土器などの宗教的行動を行った集団の存在を示す。彼らの中には、綠釉陶器や口琴を使用する者もいた。椀・皿類の豊富な消費には、彼らの宗教的行動に伴う共同飲食等が推定できよう。

揚穂木遺跡 狹山市の揚穂木遺跡は、9世紀後半から10世紀初頭にかけ、散在する掘立柱建物群と84軒の竪穴式住居から成る集落である。区画施設は確認できないが、掘立柱建物を含む数ブロックで構成されているようである。

施釉陶器は、長頸瓶6・皿9・椀6が出土している。須恵器の量が、圧倒的に多い。「郷」関連の施設とする意見もある（宮本1994）ようだが、この段階に入間台地の開発に関わった「計画村落」の存在としておこう。

宮ノ越遺跡 揚穂木遺跡と入間川を挟んで対峙する宮ノ越遺跡は、揚穂木遺跡同様、数ブロックのまばらな建物群で編成されている。施釉陶器は、長頸瓶2・小形長頸瓶1・皿4・椀20の灰釉陶器

の他、京都石作窯系とされる椀や飛蝶文の椀、あるいは輪花付段皿などの縁釉陶器が出土している。

ところで平安時代の入間郡の集落は、入間川に面した小枝谷を開拓し成立した集落である。小規模な集落が多い中で、掘櫓木遺跡と宮ノ越遺跡は比較的大きく、物資の流通の拠点（渡河点）的集落と考えられる。

椿山遺跡 莲田市の椿山遺跡は、元荒川に沿って営まれた平安時代の集落である。集落は、鍛冶工房を含む竪穴式住居群で構成されている。食器の構成は、南比企の須恵器や北總の黒色土器などが、在地の土器と共にある。

施釉陶器は、長頸瓶13・皿2・椀8があり、長頸瓶が多く出土している。鍛冶工房と灰釉陶器の長頸瓶の豊富な同様の遺跡として、花園町台耕地遺跡が上げられる。井ヶ谷78窯式から黒窯90窯式の長頸瓶が出土している。台耕地第II・III期について酒井清治氏は、地方有力者層によって成立した計画村落（製鉄集落）と位置づけている（埼玉県埋文事業団1984）。

以上、関東地方4県の施釉陶器を豊富に出土した遺跡（国府を除く）について、遺跡の性格と消費の傾向を概括した。関東4県の施釉陶器の比較的豊富な消費は、9・10世紀に集中する。関東4県の遺跡の性格と消費の傾向から消費の形態は、次の4つの類型に分類できる。

①大規模開発拠点型消費 荒廃田や山野の国府や国家の主導による大規模開発に伴い、再編成された集落や機関等での消費。中堀遺跡・北島遺跡・稻荷前遺跡・池守池上遺跡・上三川町多功南原遺跡（註12）などがあげられる。

②宗教施設型消費 宗教的集団、ないしはこれを支える在地の集団（「知識」）が、共同飲食等で消費。比較的小規模な宗教的施設は、永吉台遺跡・荻の原遺跡。大規模なものは、日光男体山山頂遺跡・氷川神社東遺跡などである。

③「市」型消費 河川の渡河点や津・港、あるいは交通路の分岐点等に当たり、物資流通の実質的な結節点（これを物資流通の中継点としての機能から「市」と表現しておく）となる集落。宮ノ越遺跡・掘櫓木遺跡・土浦市田村沖宿遺跡群（註13）などである。

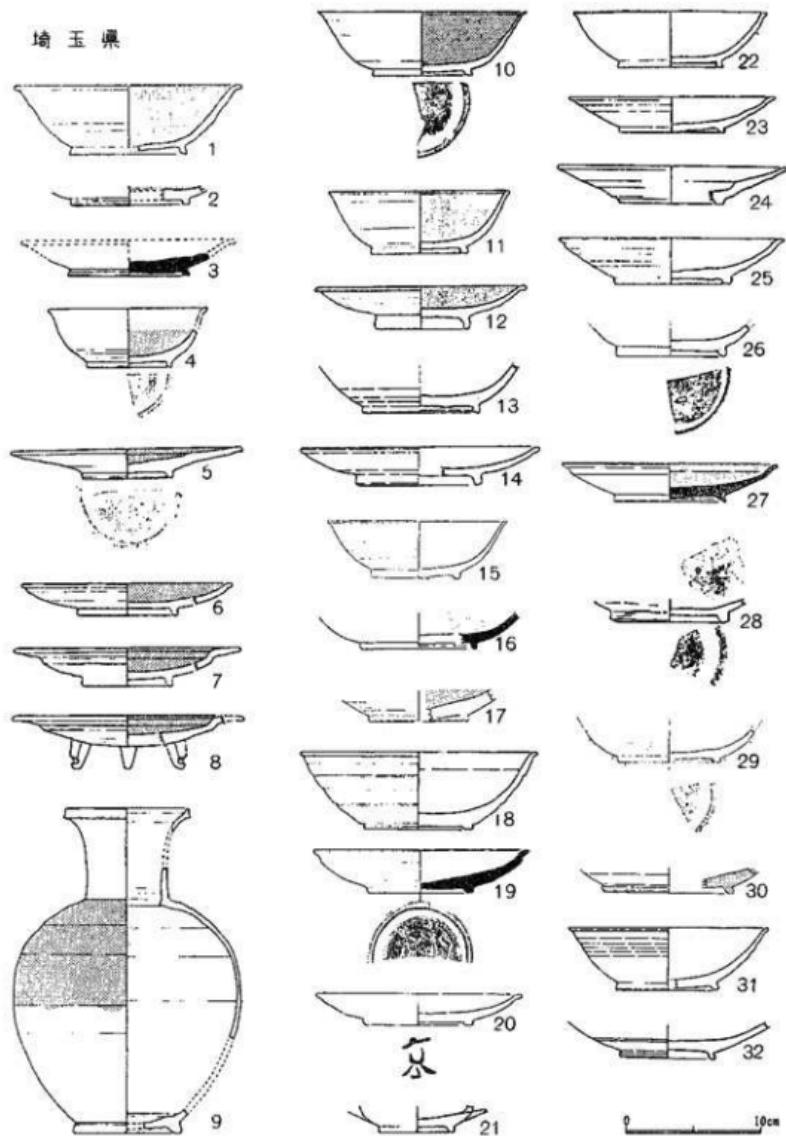
④手工業集団型消費 鍛冶工房を代表とする手工業生産者が、集住する集落で貯蔵を目的とした灰釉陶器を多く消費。台耕地遺跡・椿山遺跡・西寺原遺跡などがあげられる（註14）。

本来、施釉陶器が消費される経緯は、様々で一定の型に当てはまるはずはない。各遺跡が、それ複合した要素を兼ね備えていることを付記しておきたい。しかし宗教施設型消費以外のいずれの遺跡でも、宗教的施設や宗教的行動の跡が、少なからずみられる。平安時代には、在地化した仏教や在来の信仰が社会の根底に存在し、人的結集の契機となっていたからである。

次にこのような消費形態となる以前の段階（黒窯14窯式～黒窯90窯式古段階）の灰釉陶器の流通について、若干垣間みておくこととする。

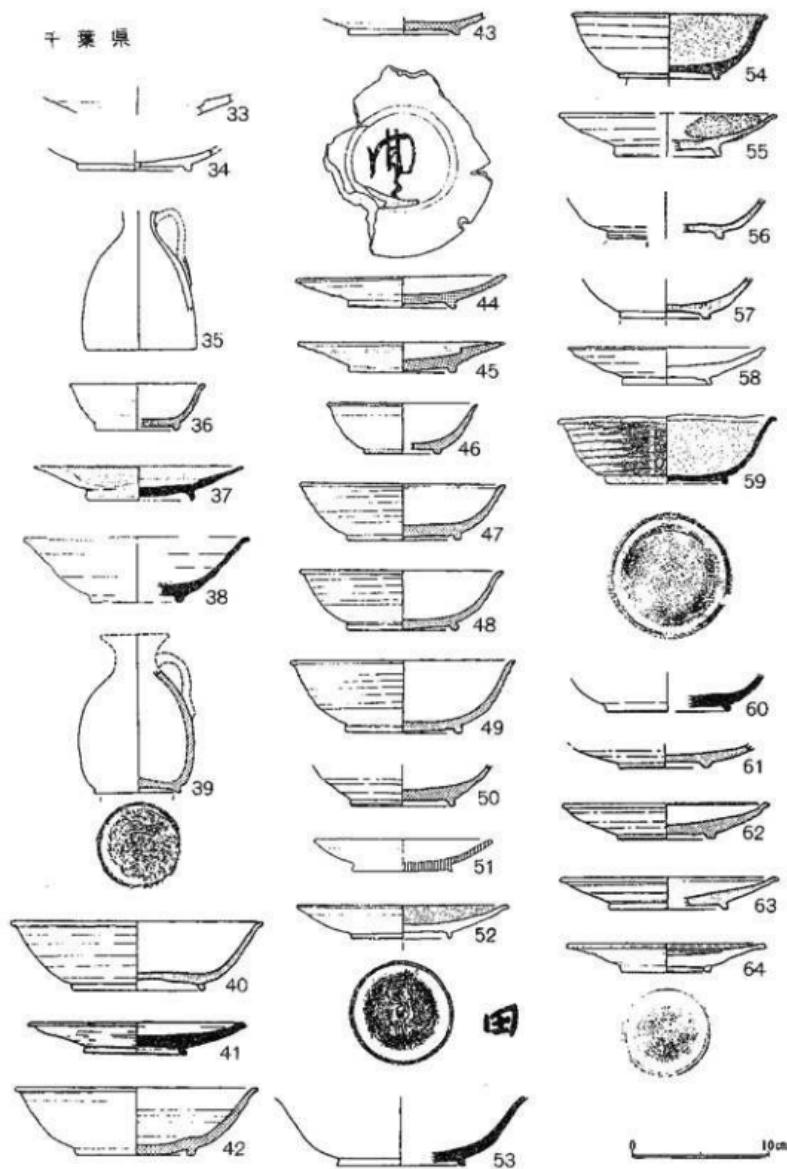
III 猿投窯跡群第V期の製品の分布と流通

榎崎彰一氏が、猿投窯跡群の第V期とされた（榎崎1983）黒窯14窯式、黒窯90窯式の製品は、関東以北の遺跡でもしばしば出土する。しかし流通量の少なかったこともあり、使用期間は相当長期にわたるようである。



第7図 埼玉県の猿投窯跡群第V期の灰釉陶器

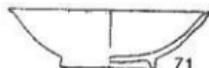
千葉県



第8図 千葉県(1)の猿投窯跡群第V期の灰釉陶器



65



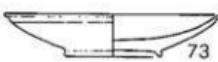
71



77



72



73



66



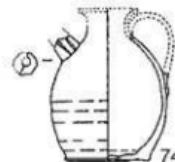
67



68



69



74



70



76



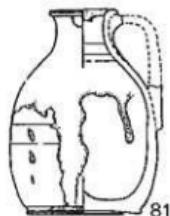
78



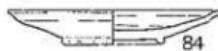
80

栃木県

茨城県



81



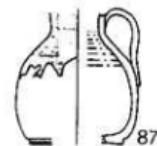
84



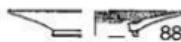
85



86



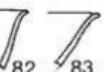
87



88

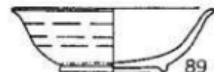


82



83

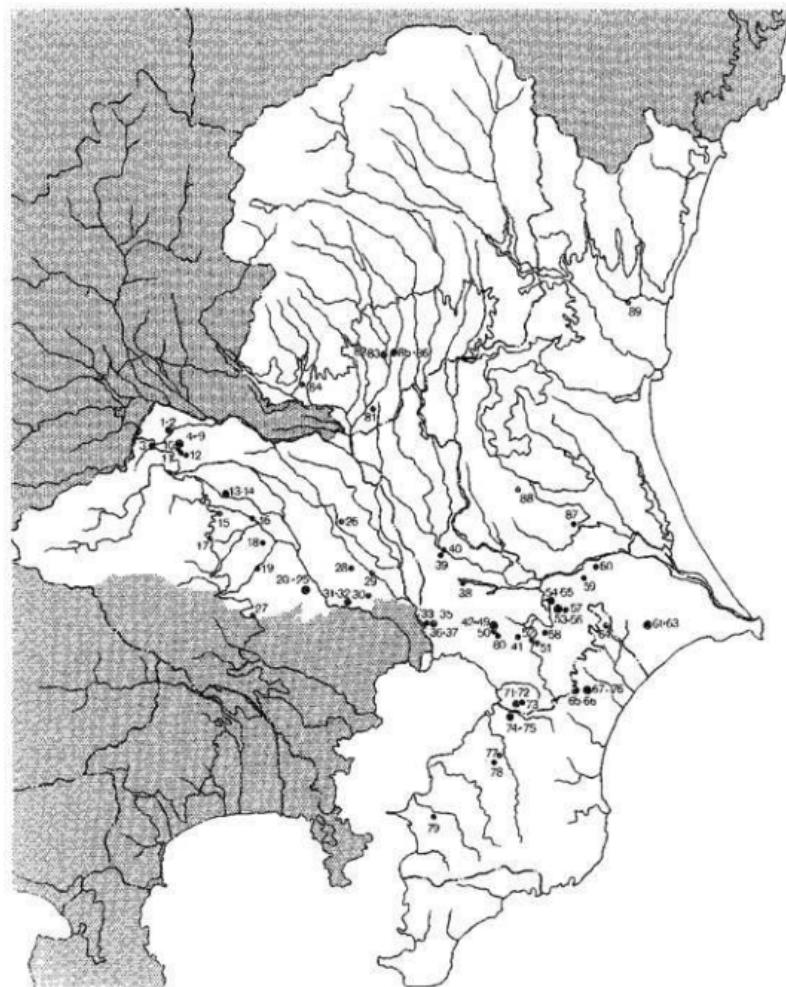
1 cm



89

埼玉 1 宮曳下62住 2 霧曳下表探 3 ミカドSD5 4~9 加来意Aグリッド 10 東山3住 11 北坂2住 12 沼下3住 13 新田坊4住 14 新田坊2住 15 舊新田2住 16 大西30住 17 越生五郷3 次遺構外 18 原11住 19 宮ノ越4住 20 東台第10地点 21 東台2住 22 東台第24住 23・24 東台第2地点1住 25 東台第2地点溝 26 桜山36住 27 基木峯包含溝 28 和田北包溝 29 上古グリッド 30 三ツ和八幡木1号溝 31・32 前谷3溝
 千葉 33 国府台第1地点1号道路跡 34 下総国分第20地点54住 35 同第15地点1号住 36 下総国分寺SI015 37 同13次7住 38 六番内10住 39 花前II-2 006横縫刈 40 花道I グリッド 41 般合作K15住 42・43 横現後D019 44~49 同D007 50 井戸向 51 寺崎367土壙 52 大崎518住 53 公津原Loc15-015住 54 谷津原Loc40-038住 55 公津原Loc40-076住 56 公津原Loc15-022住

第9図 千葉県(2)・栃木県・茨城県の猿投窓跡群第V期の灰釉陶器



57公津原Loc14-130住 58将門鹿島台土師1号集積跡 59遁々地 60不光寺SX1 61・62飯塚櫛台255住 63同244住 64小原子
 56住 65作畠73住 66同72住 67・68久我台132住 69同137住 70同234住 76久我台214住 71有吉035B住 72同069住 73高
 沢212住 74白船城5住 75同グリッド 77外迎山40号道構 78東本興寺(川原井廃寺)1号掘立柱建物 79郡(確認調査) 80白
 横前D142

楠木 81乙女不動原H-24 82・83下野府跡SX021 84鉢之前HT38 85下野溫分寺SD723B 86同SK749
 宮城 87恩川4住 88北郷C11住 89うぐいす平20住

第10図 猿投窯跡群第V期の灰釉陶器の分布

群馬県の施釉陶器を分析された綿貫邦夫・神谷佳明・桜岡正信氏によると、「(前略) 黒笛14窓式期、黒笛90窓式期のものは、単独で出土しているものが大部分であるのに対して、光ヶ丘1号窓式期のものは、(中略) 複数の灰釉陶器を出土する住居跡も數多くみられる」とされ、その存続年代については、「黒笛14窓式期の製品においては、その使用期間は黒笛90窓式の供給が開始された時期以降50年以上にもわたって使用されている」(綿貫・神谷・桜岡1992)と結ばれている。

施釉陶器の生産地である東濃・東海地方により近い群馬県でもこのような状況である。今回集成した関東4県は、さらに生産地から離れ、同様な使用年代幅は、より考慮されるべきである。

(1) 猿投窯跡群第V期の資料とその分布

ともあれ猿投窯跡群第V期の関東4県の集成資料は、第7図から第9図の通りである。この図の作成に当たって次のこと留意した。まず製作技法上、高台が角高台(黒笛14窓式)か、やや三日月がかった内反りの高台(黒笛90窓式)。施釉陶器は内面底部まで厚く刷毛塗り(黒笛14窓式)か、内外面の体部まで刷毛塗り(黒笛90窓式)。窯道具として三叉トチの存在がみられるもの。全体のプロポーションとしては底部から口縁部に向かって大きく開き、口唇端部では折れない形態。底部のヘラケズリ調整が体部まで及ぶものを任意に選択した。とくに碗・皿類を中心に集成し、手付瓶や長頸瓶・平瓶は補助的にかけた(註15)。

関東4県の分布をみると、やはり埼玉・千葉県に多く分布している(第6図参照)。この段階の施釉陶器の生産は、猿投窯を中心がある。群馬県で黒笛14窓式の製品が、十数点しか出土していないという指摘(綿貫・神谷・桜岡1992)を踏まえると、東海道ルートの製品の移動を積極的に裏付けているよう。

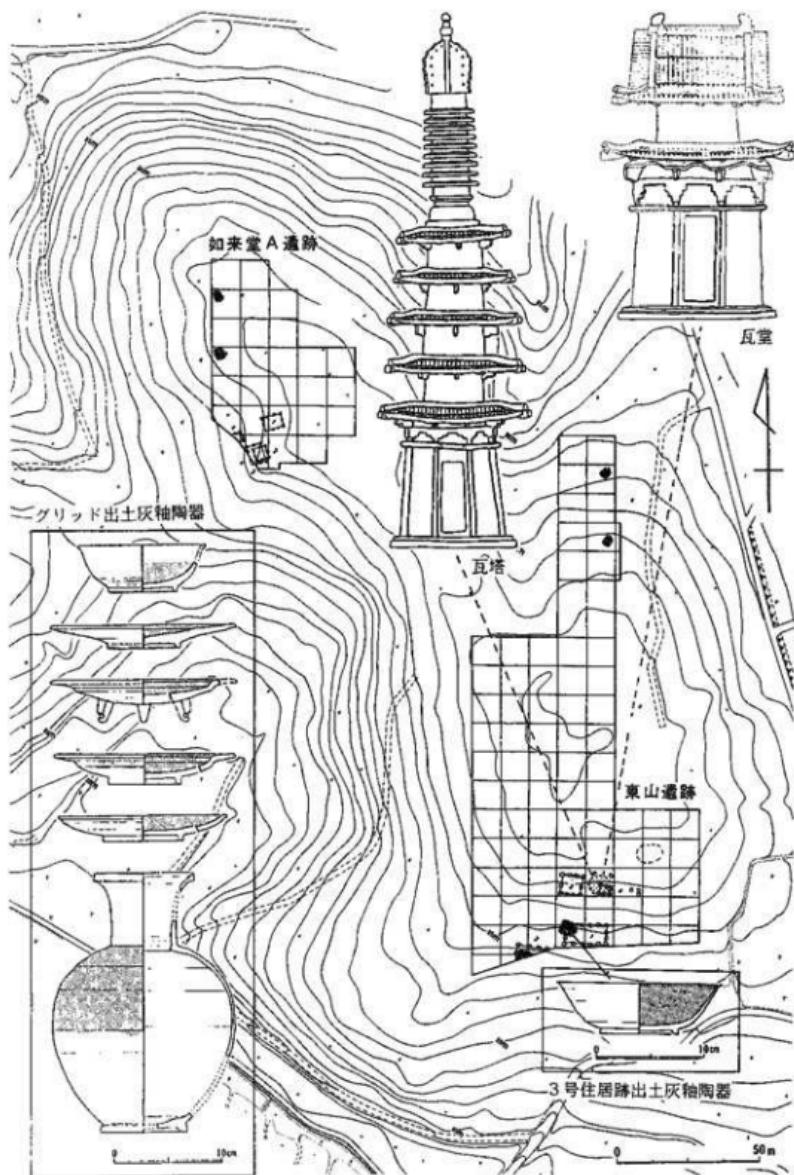
ここで確認しておきたいのは、単品で出土すると漫然と思われがちな猿投窯跡群第V期の製品が、実は第一義的にはいくつかの器種、あるいは個体が集合した「セット」として移動していた可能性が高いことである。次に猿投窯跡群第V期の製品が、まとまって出土している二つの遺跡を話の糸口としたい。

(2) 甘粕山遺跡群と権現後遺跡における存在形態

埼玉県美里町の甘粕山遺跡群は、甘粕山と呼ばれる独立丘陵の小支丘に点在する如来堂A・B・C遺跡・東山遺跡などから成る遺跡群である。如来堂A遺跡では、黒笛14窓式の灰釉陶器の小形の碗(第7図-4)、段皿(5)、皿(6)、三足盤(7)、段皿(8)、長頸瓶(9)が、グリッドからの出土として報告されている。小型碗の高台径と段皿の内稜の径が一致し、さらに三足盤などの皿形が、ほぼ口径を同じくする。一括して移動や収納したのであろうか。如来堂A遺跡では、丘陵斜面寄りに小型の掘立柱建物群4棟が集中し、竪穴式住居2軒が点在する。これは次にみる権現後遺跡の例と共通する(第10図参照)。

また碗(10)が、瓦塔・瓦堂の出土した著名な東山遺跡から出土している。その他の地点では、竪穴式住居群が点在していた。この丘陵全体が、一つの宗教的空間として存在していたようである。

千葉県八千代市の権現後遺跡は、白糸前遺跡・井戸向遺跡・北海道遺跡などと共に董田地区遺跡群として展開した集落である。平安時代の集落は、台地の東側に遍在(第11図参照)し、報告書によると4つの住居群に分かれている。各住居群には、3~5棟の掘立柱建物群がある。灰釉陶器は、



第11図 甘粕山遺跡群と施釉陶器と瓦塔

この掘立柱建物群に隣接、ないしは重複した竪穴式住居から出土している。

第Ⅰ住居群D007住居跡では、大量の土器類・須恵器の碗・皿類・煮沸具と共に灰釉陶器6点が出土している。段皿(第8図-45)・皿(44)・大椀(49)・中椀(47・49)・小椀(46)である。報告書の出土遺物のドットマップから灰釉陶器の出土地点を起ると、「床直」の状態で出土しているのではなく、覆土中位から出土しているようである。しかも竪穴式住居の甕よりと、その対面に分かれ出土している。必ずしも良好な「一括」出土の状態ではない。しかし掘立柱建物群(6棟)との関わりは、否定できない。器種組成や口径を勘案した場合、権現後遺跡の例は、掘立柱建物群まで重ね椀の状態で移動し、D007住居跡に廃棄されたと理解しておきたい。

なおD007住居跡からは、大量の食器が出土している。あるいは掘立柱建物群の「厨」的な性格が考えられよう。

また第Ⅱ住居群D019住居跡でも、椀2(42・43)が出土している。やはり掘立柱建物群4棟に隣接する竪穴式住居であり、掘立柱建物と重複する。

この他に以下の遺跡で複数個の猿投窯跡群第V期の製品が、出土している。富士見市東台遺跡(皿3・段皿1・椀1・耳皿1)・芝山町作畑遺跡(椀1・皿1)・東金市久我台遺跡(椀2・皿3)・川本町新田坊遺跡(椀1・皿2)・飯塚柳台遺跡(皿3)などである。これらは出土遺構は異なるが、出土点数が限られ、重ね椀的な器種組成である。

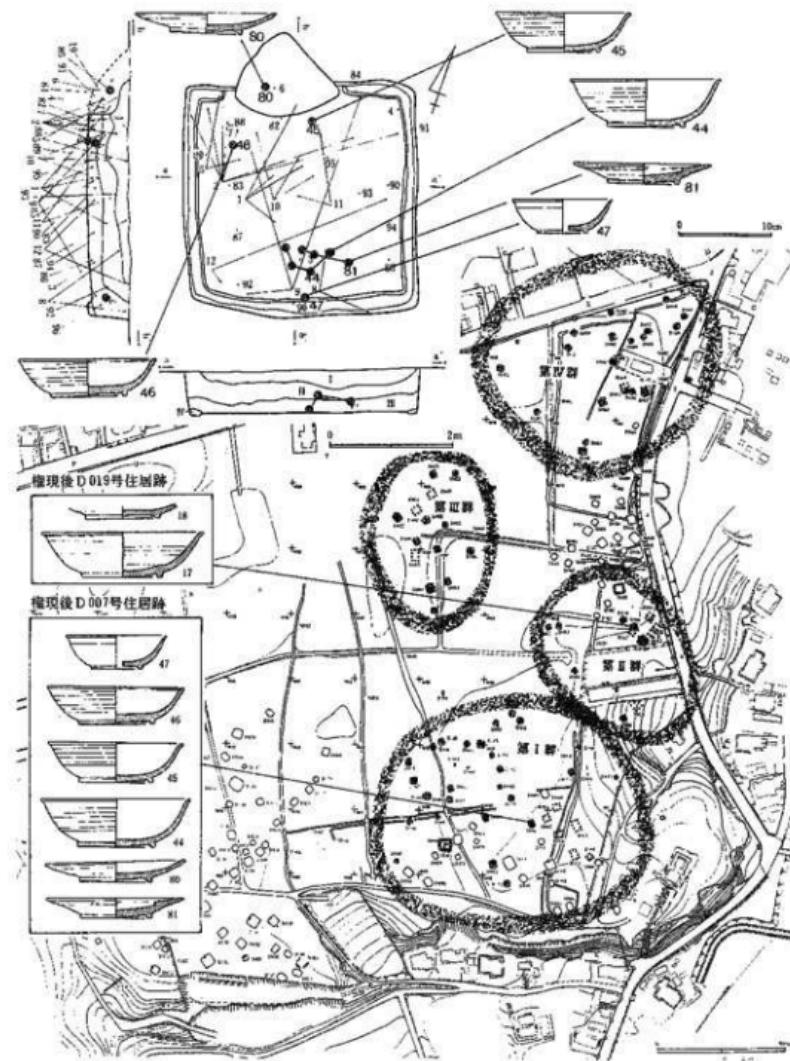
以上から猿投窯跡群第V期の製品は、第一次的には関東地方でも椀・皿あるいは段皿・耳皿の複数個が、重ね椀、ないしは一括の状態で流通していたのではなかろうか。

(3) 猿投窯跡群第V期の製品の流通と社会的背景

地方におけるこの段階の製品が、複数個で使用されたことは、すでに製作の段階で互換性のある器種組成を保っていたからであろう。しかも無論、各竪穴式住居の居住者が、個別に施釉陶器を欲したのではなく、おそらく總体として集落、あるいは集落を代表する首長が必要したためであろう。製作者は、顔も知らぬ第一義的な使用者が、複数個で使用するという需要に報いるべく生産したのだから。

東国では、黒帯14窯式の製品が、折戸53窯式と共に伴する段階まで長く使用されていた。灰釉陶器が、高価値で祭祀性の強い単なる貴重品として伝世されただけではない。絶対的供給量が、少ない製品だから再度繰り返し使用したのである。遺跡に残された状態が、あくまでも最終的な消費行動(各竪穴式住居に残された遺物が、必ずしもその竪穴式住居で消費された遺物の全てであるとは限らないが)とするならば、セットが欠落していく過程で、施釉陶器が入手できれば施釉陶器で、不可能ならば在地の焼き物で補完していくのは当然のことである。

しかも、その消費形態の背後に如来堂A遺跡や権現後遺跡のような掘立柱建物群(宗教的施設)があったことは看過できない。無論、人的な結集の精神的な拠り所として、寺院や神社などの宗教的施設が存在したのは当然のことである。



第12図 横現後D007号住居跡の施釉陶器の出土状況(上)と横現後遺跡と施釉陶器(下)

IV 施釉陶器の流通とその歴史的背景

¹⁴関東4県の旋轉陶器の出土状況の概観によつて、従来、漠然としていた流通の実態が、謎気なが

ら見えてきたようである。ここまで状況証拠をまとめておくこととする。

①埼玉を1とした施釉陶器の消費量は、千葉が3、栃木・茨城が0.4程度である。

②各県とも施釉陶器が相対的に豊富な遺跡がある。その遺跡は、a「大規模な計画村落」、b「宗教的施設と関連集落、祭祀遺跡、c「渡河点・交差点等の交通の要衝」、d「手工業集団の集落などに分類できる。これらは消費形態の違いからa「大規模開発拠点型消費」、b「宗教施設型消費」、c「市」型消費、d「手工業集団型消費」と位置付けた。

③猿投窓跡群第V期の製品は地方でも、重ね碗を主体とした流通が第一義的であると推定される。

④猿投窓跡群第V期の一部の製品は、主に宗教的施設を媒介として集落へ流通していたようである。

これを踏まえ、次に施釉陶器を平安時代の流通史の中へ組み込んでいくこととする。

(1) 国府間交易と施釉陶器の消費

平安時代の流通史を考える上で触れなければならないのが、柴原永遠男氏の『奈良時代流通経済史の研究』(柴原1992)である。柴原氏は、奈良時代に(1)都城の東西市を核とした中央交易圏、(2)各地の「国府経済と国府官人の私経済を支えるための国府市」と自然発生的な「地方市」とが密接に関係する国府交易圏、(3)難波津と国際交易、(4)伝統的な地方豪族や郡領層の一族を中心とする人々による遠距離交易などを明らかにされた。

とくに本稿と密接に関わる国府交易圏について、(1)国府市や地方市を限られた文献資料と残存地名から探られ、両者が、地方流通経済の結節点であったこと(2)都城・国府を問わず税として移動する物資の流通の実態、そして(3)「奈良時代の流通体系は、流通経済の発展の中で、律令国家から相対的に独自な「商人」の交易活動の結果として成立したものではなく、かえって律令国家への貢納制に規定されて成立してきたこと」を指摘されている。

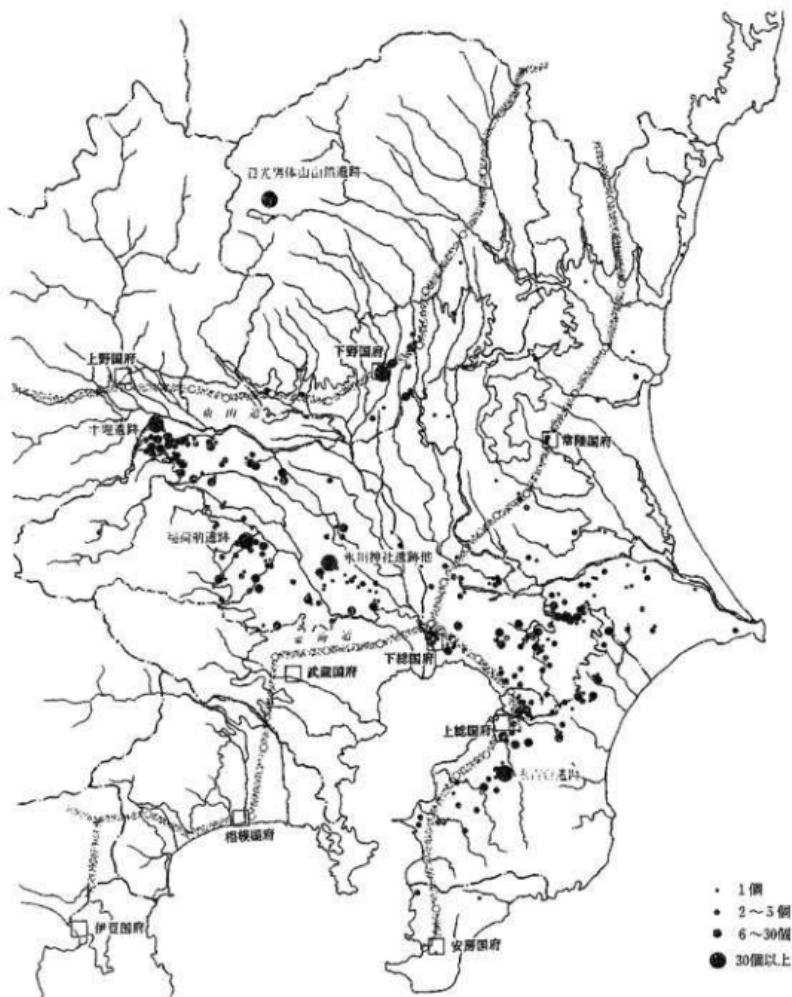
ところで本稿で扱った施釉陶器、とくに灰釉陶器は、先学の研究に従うと9世紀以降、11世紀にかけて、東海地方西部の諸窯を中心に爆発的に生産され、畿内や東国各地で消費された。この段階は、律令国家の行政機構が、王朝国家的なそれへと変貌する段階である。税の収取体系の変化や国家的軍事行動の転換、あるいは集落間の新たなネットワークが、奈良時代の国府交易圏のような地方の物資の流通体系を変革したことは予想される。

具体的な変化としては、地方行政の中心的役割を担っていた郡家が、政庁をはじめ、これを取り巻く集落まで消滅・移転し、次第にその姿を不鮮明にしていく。また郡家などと共に編成されたいわゆる計画村落も、姿を消していく(田中1994)。その一方、武藏・下総・常陸・下野・上野などの推定国府域では、竪穴式住居や掘立柱建物群など急速に増加(「国府が充実」)してくる(荒井1994)。むしろ奈良時代よりも平安時代前期に国府としての政治的経済的基盤が、整備されるといつても過言ではない。

本稿では東国の推定国府域の施釉陶器の使用の実態について、明確化していないので具体的に述べられない。しかし下野国府例をみるとまでもなく、国内の他の遺跡と比較にならないほどの消費量である。この消費は、推定国府域に居住した国司や郡司、園師などの僧侶等や彼らを取り巻く人々が、施釉陶器の需要を支えていたためである。彼らは、都城における食事や宴などを推定国府域で実行し、そこで使用される食器を需要した。少なくとも国司(おそらくこの段階では受領であろう)

の需要を満たすだけの製品（輸入陶磁器や緑釉緑彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器等）は、常に国府間交易や遠隔地間交易等で確保されていたはずである。

権門諸家の肥大化した家産経済が、受領等に支えられ、その受領は、各國で莫大な収益を上げていたことは、『今昔物語集』や尾張国守藤原元命の百姓訴状などからも推定され、その収益の一部に



第13図 関東4県の施釉陶器の遺跡別消費量と官道 (中村第IV期)

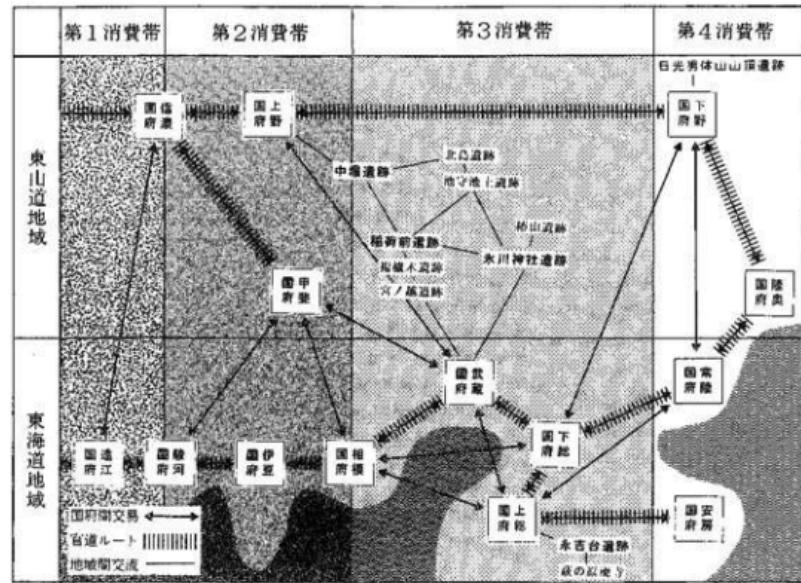
預かるべく結集した「郎党」、あるいは「不善の輩」などがいたことを森田悌氏は指摘する（森田1979）。彼らこそが、国府における施釉陶器確保の実働集団なのであろう。

国府における施釉陶器の集中は、在庁官人や郡司、あるいはいわゆる富豪層、さらに軍事貴族（石母田1956）として土着化していく受領等の交換の場（流通ターミナル・国府市）が、存在していたからに他ならない。

(2) 施粧陶器の豊富な墓葬と国府のネットワーク

官道は、桓武朝の東北経営政策の転換に伴い、軍事交通路としての色彩をさらに強め、物資の輸送や派兵の移動のための再整備（中村第IV期）が行われていく（中村1993）段階に至っていた。推定国府城以外で豊富に施釉陶器を消費する遺跡は、古代の官道には沿わない（第12図参照）。しかもこれらの集落が、独自のルートで施釉陶器を生産地から入手したとも考えがたい。やはりより大量の消費地である近隣の国府や主要な「地方市」あるいは豊富に消費する集落などを媒介し、入手したのであろう。

中堀遺跡にみると、例え国府や国家の関与した開発や宗教的施設であっても、その所在する国の国府倅から供給されたのではなく、近くの「国府市」や「地方市」等の流通ターミナルから購入・交換し入手したのであろう。施釉陶器が在地の流通システムによって移動したとすれば、官道ルートとは別の在地の流通ルートを明らかにすることが可能であろう。



第14図 灰釉陶器の消費量と東国の大流通ネットワーク

柴原氏のいう「地方市」の存在は不明瞭（註16）だが、施釉陶器を豊富に消費する遺跡が、逆に市の機能、すなわち交換の場、流通の結節点としての役割を担い、周辺の関連集落へ再分配していく可能性は捨てがたい。このように東海・東山道西部を発進した灰釉陶器は、東国各地の国府を第一義に、さらに比較的豊富に消費する遺跡を第二義に目指して東進していったのであろう。

さらに「一般的の集落」では、竪穴式住居から出土する灰釉陶器は、土器総量のほぼ全体（長野県伊那谷）、半分（長野県松本周辺）1～3割（長野県から群馬県）、集落で1・2点（埼玉・千葉）集落からもほとんど出土しない（北関東以北）と地理的に分かれる。東山道ルートでは、長野県伊那谷から松本平までの第1消費帯、筑摩山地以東群馬県西部までの第2消費帯、今回分析した埼玉・千葉県までの第3消費帯、栃木・茨城県以北の第4消費帯に概ね分けて考えられる。第13図は、この関係を図に表したものである（註17）。

つまり灰釉陶器は、このように国府間の交易システムと施釉陶器を豊富に消費する遺跡間の在地の交易システム、そして第3の交易システムによって流通していたと考えられる。この第3の交易システムとは、宗教活動のネットワークを通じた交易システムである。

（3）平安仏教と交易システム

すでにII・III章で確認したように、灰釉陶器を消費する遺跡は、少なからず宗教的施設を含んでいた。とくに灰釉陶器の流通し始めた平安時代前期には、東国の一集落の内部にも、小規模ながら仏舎・仏堂が建立され、信仰の対象となっていた。これらは、「村落内寺院」とされ、『日本靈異記』や『宇治拾遺物語』などにも盛んに登場する。

一方、令制国毎に置かれた國分寺は、諸國の仏教センターとして積極的な宗教活動を行っていた。國分寺における施釉陶器の使用自体については本稿では述べなかったが、今回集成した下締・上締・下野國分寺の例をみると、國府同様、施釉陶器の主体的消費地であったことに違いはない。さらに淨法寺（綠野寺）や大慈寺など天台宗や真言宗の教団や宗教組織を通じた人的交流は、寺院における施釉陶器の流通にも大きな役割を果たしたと推定される。

とくに淨瓶や三足盤・段皿・耳皿・穢椀などの金属器模倣の仏器は、宗教的施設や宗教的行動に必要であり、使用者が直接持ち歩き運搬したこともある。しかしこの宗教的ネットワークを通じ、流通した可能性もある。しかも宗教的ネットワークは、全てに超越するものではなく、先の在地のネットワークや国府間の交易を媒介として、副次的に存在したと考えられる。

まとめ

以上、長々と愚考を重ねてきた。当初示した一般論は、どの程度検証できたか心許ないが、簡単にまとめておくこととする。

① 施釉陶器、とくに灰釉陶器の流通する段階にあっては、地方行政機構は、国府に集約されるらしく、郡家は、はなはだ不鮮明となる。「灰釉陶器の出土は、郡家の存在を推定させる」といった曖昧な根拠では、施釉陶器の流通は見通せない。郷家や駅も実態の明らかでない現在、施釉陶器と両者に積極的な関連を強調すべきではない。

むしろ今回の集成作業を通じて、施釉陶器の出土する遺跡は、国府、平安時代に新たに開発され

る遺跡、在地の交通の結節点、寺院をはじめとする宗教的施設、製鉄集団等の手工業者の集落（註18）、そしてこれらと関連した集落であった。奈良時代の施釉陶器が、官からの支給品や官の所有物であったとすると、平安時代の施釉陶器は、より自由ないわば商品的な流通と理解できる。

② 施釉陶器は、流通量に地域的な偏差がある。第1消費帯では、原氏が、灰釉陶器を「当たり前」と表現した（原1994）ように、すでに在地の須恵器生産や土師器生産をある程度浮揚していた。東濃諸窯の製品が、在地の需要を満たしていたのである。しかし第2消費帯以東は、施釉陶器はあくまでも客体的である。それは在地の土器生産が、その役割を充分果たしていたためである。灰釉陶器も東山72窯式以降、東国への流通は減少し、山茶碗になるとほとんど供給されない。

この背景には、在地に根強い土器生産体制があったこと。国家側に、7世紀後葉のような都域の土器様式を集落内部まで制度的強要（食器の律令制的土器様式）させようとする動きがなく、国府や寺院など上部構造の消費を確保することを第一義としたこと。生産者が官奴として生産に関わったのではなく、生産者は、在地の手工業者集団の一部として再編成されていたこと。そしてその生産量は、消費量を予測した計画的生産ではなく、拡散的需要に委ねられていたこと。つまり灰釉陶器の生産は、無限に広がる東国の消費者をマーケットとした生産ではなかったことであろう。

③ 施釉陶器は、金属器や輸入陶磁器の模倣から開始されたが、これが直截的に祭祀的な遺物として判断する必要はない。出土する遺構・遺跡に残された最終的な消費形態を分析した上であらためて判断すべきである。

④ 折戸53窯式以前の施釉陶器は、甚だしく伝世する。佐々木達夫氏が、「舶載遺物の考古学」の中で、輸入陶磁器をめぐり、「使用様式・生活様式・文化様式」を的確に捉えた上で議論すべきであると言う提言（佐々木1992）をされておられる。国内の土器、ことに施釉陶器の流通でも同様である。

関東地方の灰釉陶器は、古墳時代の須恵器の存在形態と対比されることがよくある。それは相対的に消費量が少なく、集落からの出土は、1・2点程度にとどまるからである。須恵器の場合は、巨大生産地の工人と各地の工人が人的交流を行い、各地で粘土や燃料を確保し、築窯・操業することで、7世紀後葉、遅くとも8世紀中葉に絶対的な不足分を解消するまでになる。しかし施釉陶器の場合は、施釉陶器の生産技術が、猿投窯跡群・東美濃・三河・湖西・尾北・美濃須衛・旗指等には拡散したが、関東以北へは技術的な伝播はみられなかった。関東以北は、巨大生産地からの流通ネットワークを通じ、必要量が確保できたからである。

施釉陶器は、決して流通史上、古代東国（奈良・飛鳥）の流通機構を変えるほどの存在ではなかった。むしろ從来存在していたネットワークに便乗し、古代的な枠組みの中で、一集落の堅穴式住居まで流通したのである。この流通大系は、奈良時代的な生産関係と流通機構が、発展的に解消し、王臣家や社寺の莊園・封戸、国衙領や勅旨田の經營など新たな収奪体系との相剋の中から生まれてきた。しかもこの新たな収奪体系は、施釉陶器を通じ確認した3つの交易システム（国府間交易、在地内交易、宗教的交易）が、存在してこそ円滑に運営されたのである。

残された課題は多いが、関東4県における施釉陶器の実態量の調査と報告という本稿の初期の目的は、達成されたと思う。今後は、消費形態にみる縁釉陶器と灰釉陶器の関係、国府の消費の実態、輸送手段や輸送集団・経路の問題など、残る関東3県や周辺地域の実態の把握を踏まえて、施釉陶

器の流通から古代の社会像をさらに掘り下げていきたく考えている。

最後となつたが、本稿を起こすに当たつて、生産地の資料を実見させていただいた。各機関ならびに担当の方々には大変ご迷惑をかけた。ご芳名を掲げ、お礼に代えさせていただきます。

小野善裕・木本雅朗・高橋照彦・津野仁・出越茂和・原明芳・服部哲也・中島隆・水野裕之・安田幸市・山口耕一・山下峰・小牧市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター・多治見市埋蔵文化財センター・名古屋市見晴台資料館・三好町立歴史資料館（あいうえお順）

なお本稿は、平成5年度埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成「平安時代の施釉陶器」の成果の一部である。

註

1 型式学的検討や年代学的検討は、横崎彰一・高島忠平・坂野和信・斎藤孝正・前川要・田口昭二氏等の研究を参考させていただいた（横崎1969・1983・高島1971・坂野1979・斎藤1981・82・87・前川1984・1989・田口1982）。

2 この方法では、在地内で絶えず供給の固れる須恵器・土師器と、遠距離にある生産地から広域的な流通を媒介とし供給された施釉陶器が、同一条件で量比を比較することは難しい。なぜならば、灰釉陶器が、破損や消耗しながらも伝世し、器種組成の一部を構成していた可能性があるからである。

また無差別に抽出した分析対象遺跡（発掘調査された遺跡が、開発に伴う調査であるため無差別抽出である）が、古代という枠組みの中で担っている社会的な役割分担が、施釉陶器の流通にどのような影響を与えていたかは全く分析されない。なお関東地方の主な遺跡の出土土器中における施釉陶器の構成比率について、高橋照彦氏のデータを参考にした（高橋1994）。

3 梶山氏は、茨城県内出土の施釉陶器を集成し、その出土遺跡の性格を古代官衙や官道・駅との強い関係性を指摘している。

4 三浦氏は、群馬県の灰釉陶器を分析し、平安時代後期の在地出土器の年代観や編年論に一石を投じた。

5 締貫・神谷・桜岡の三氏は、三浦氏の研究を受け、群馬県内の灰釉陶器の基礎的研究から消費地群馬県の実態を明らかにされた。本稿は、これに触発されたところが大きい。

6 原明方氏は、長野県の施釉陶器を分析し、その消費の実態を明らかにされた。中でも松本市下神造跡のような「館」的な遺跡における施釉陶器の消費の分析は、本稿にとって有意義であった。

7 具体的には、以下のように資料の調整を行った。

関東4県の平安時代の遺跡の調査件数及び調査量を具体的に知ることは難しいので、便宜的に日本考古学協会の協会員の県別会員数の比で表した（a）。

また平安時代の遺跡数に県別の偏りがあることを考慮して、平安時代の県別の推定人口を算定し、県別人口比を求めた（b）。人口の推定は、沢田晋一氏の先駆的研究（沢田1972：復刊）で算定された令制国別人口を基に、現在の県域に推定される郷数で配分した。郷の推定は、「埼玉県史」「茨城県史」「房総考古学ライブラリー」によった。

これを踏まえ、まず今回集成した施釉陶器（具体的には灰釉陶器）の県別総量（C）を埼玉を100とした県別協会員比で調整（ $C/a = c$ ）し、さらに県別人口比率で調整（ $c \times b$ ）した。

8 県別の消費量比は、各県が、國府の資料を均等に抱えているわけではないため、ここではいわゆる「一般の集落」における施釉陶器の県別消費量と理解していただきたい。

9 「計画村落」については用語自体に問題があるとして、鈴木徳雄氏は、埼玉県児玉地方の事例の分析から古代の地域開発の姿を位置づけられている（鈴木 1992）。

10 中堀遺跡は、現在調査中なので、以下の資料を参照されたい。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992・93 現地説明資料『中堀遺跡』1・2

- 11 上荒屋遺跡では、多量の墨書き土器が出土し、初期莊園の実態が解明されつつある（出越1992）。
- 12 栃木県教育財団調査。下野葉師寺と連動し展開した集落とされる。山口耕一氏ご教示。
- 13 山武考古学研究所調査。常陸國の國府津と考えられる。
- 14 これら相対的に多くの施釉陶器が出土する遺跡は、本来これらの遺跡と同様の施釉陶器の消費形態を示すと思われるにも関わらず、調査面積が小さいために分析できなかった遺跡として旧盛德寺跡・愛宕通遺跡・水利土塚の内遺跡・船ヶ間遺跡・東台遺跡・宮町遺跡・山田遺跡・白草遺跡・東の上遺跡・前谷遺跡・三和遺跡・高岡庵寺遺跡などがある。
- 15 関東4県にみられたこれらの遺跡は、おおむね4つの類型に分類できたが、これらは関東4県の分析より抽出した現象であり、おそらく東京・神奈川・群馬県にも同様の遺跡を見いだせよう。具体的には、東京都日野市落川遺跡・神奈川県海老名市本郷遺跡・群馬県吉岡村浦里陣馬遺跡などである。
- 16 この中には、第V期の製品として不適切なものも含まれているとおもわれる。12は、美里町沼下遺跡3号住居跡から出土した皿であるが、高台が高いことが気になる。17は、越生町越生五領遺跡から出土した資料であるが、長頸瓶の底部かもしれない。27は、所沢市基本峯遺跡包含層から出土した皿であるが、高台がやや蛇の目状である。37は、市川市下総国分寺第13次調査7号住居跡から出土した段皿であるが、三日月高台である。
- 17 「市」を発掘調査で明確化することは難しいが、将来的には何らかの形で追求していくべきではない問題である。輸送の問題や消費者側の需要の問題、さらに生産力・量の問題から本来、生産地から運ばれるに従い、同心円状に供給量（消費量）が、減少していくのは当然のことである。しかし豪華なこの状況を抽象的に理解するではなく、具体的にどの地域では、どの程度消費があったかを知る必要がある。消費者側における分布論の課題は、同心円状の供給が、政治的な枠組み（編成）や社会的階層あるいは地理的状況などからどのように変移されていくかを抽出し、そこから逆にそれらをたどっていくことである。
- 18 本稿では分析しなかったが、「國府問交渉」については、在地土器の動態を通じて解説した。また在地内流通については、遺跡間の関係や地理的位置関係などを考慮した。
- 19 手工業者の集団が、相対的に自立性を高め、施釉陶器を需要したのではなかろう。消費された器種が、とくに長頸瓶を主体としていることからも彼らが、より上位の首長から供給されたと考えられる。

参考文献

- 浅野樹 1980 「埼玉県内出土の平安時代末期の施釉陶器」『研究記要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 荒井健治 1994 「武藏国府にみられる国分寺造営の影響」『古代東国の民衆と社会』名著出版
- 石母田正 1956 「古代末期政治史序説」未来社
- 梶山雅彦 1992 「茨城県内の灰釉陶器」『研究ノート』第3号（財）茨城県教育財団
- 斎藤孝正 1981 「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告』多治見市教育委員会
- 斎藤孝正 1982 「猿投窯における灰釉陶器の変遷」『特集・越州窯青磁と平安時代の綠釉・灰釉陶 考古学ジャーナル』211号 ニューサイエンス社
- 斎藤孝正 1987 「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相」『名古屋大学総合研究資料館報告』3 名古屋大学
- 斎藤孝正 1987 「施釉陶器年代論」『論争・学説 日本の考古学』6 歴史時代 雄山閣出版
- 柴原永遠男 1992 「奈良時代流通経済史の研究」壇書房
- 佐々木達夫 1992 「舶載遺物の考古学」「アジアの中の日本史III」東京大学出版会
- 浜田晋一 1972 「奈良朝時代民政経済の歴史的研究」（復刊）柏書房
- 鈴木健雄 1992 「古代見・I郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条尾遺跡』児玉町教委
- 須田勉 1985 「平安後期における村落内寺院の存在形態」『古代研究II』早稲田大学考古学会
- 高島忠平 1971 「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第57卷第1号

- 高橋一夫 1979 「計画村落について」『古代を考える』20—東国村落遺跡の研究— 古代を考える会
- 高橋照彦 1994 「東国の施釉陶器」『古代の土器研究』3 古代の土器研究会
- 田口昭二 1982 「尖底窓の灰釉陶器と緑釉陶器」『特集・越州窑青磁と平安時代の緑釉・灰釉陶 考古学ジャーナル』21号 ニューサイエンス社
- 田中広明 1994 「古代官衙の終末をめぐる諸問題」東日本文化財研究会
- 出越茂和 1992 「金沢市上荒尾遺跡」金沢市教育委員会
- 出越茂和 1991 「加賀における施釉陶器の展開」『金沢市千木ヤシキダ遺跡II』金沢市教育委員会
- 出越茂和 1994 「北陸の施釉陶器—加賀を中心にして—」『古代の土器研究』3 古代の土器研究会
- 直木孝次郎 1965 「古代国家と村落—計画村落の視角から—」『ヒストリア』第42号 大阪歴史学会
- 中島 隆 1982 「桃花台ニュータウン遺跡調査報告書」小牧市教育委員会
- 中村太一 1994 「東国国府の立地と交通路」『古代東国の国府と景観』國學院大學史学会
- 橋崎彰一 1969 「壺器の道(—信濃における灰釉陶器の分布—)」『名古屋大学文学部20周年記念論集』
- 橋崎彰一 1983 「愛知県古窯跡群分布調査報告(III)」愛知県教育委員会
- 原 明芳 1994 「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究』3 古代の土器研究会
- 坂野和信 1979 「日本古代施釉陶器の再検討(1)」『考古学雑誌』第65巻2号 日本考古学会
- 堀内明博 1983 「平安京出土の灰釉陶器編年私案」『京都考古』第29号
- 前川 要 1984 「猿投塲における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として—」『研究紀要III』瀬戸市歴史民俗資料館
- 前川 要 1989 「平安時代における施釉陶器の様式論的研究(上・下)」『古代文化』第41巻8・10号
- 三浦京子 1988 「群馬県における平安時代後期の土器様相—灰釉陶器を中心にして—」『群馬の考古学』創立十周年記念論集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮本直樹 1994 「22 場木遺跡」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本文化財研究会
- 森田 悌 1979 「王朝政治」吉川弘文館
- 森田 悌 1984 「猿投塲灰釉陶器編年再考」『古代文化』第36巻第8号
- 柳沢和明 1994 「東北の施釉陶器」『古代の土器研究』3 古代の土器研究会
- 吉田恵二 1980 「猿投塲の壺器生産をめぐって」『考古学雑誌』第66巻第3号
- 吉田恵二 1983 「灰釉陶器の系譜」『土曜考古』第7号
- 綿貫邦夫・神谷佳明・接觸正信 1992 「群馬県における灰釉陶器の様相について(1)」『研究紀要』第9号 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 國學院大学史学会 1994 シンポジウム「古代東国の国府と景観」
- 国立歴史民族博物館 1986 「国立歴史民族博物館研究報告」第10集 共同研究「古代国府の研究」
- 埼玉県立歴史資料館 1994 「埼玉の瓦塔」
- 千葉県文化財センター 1994 「房総考古学ライブラリー」7 歴史時代(1)
- 東日本文化財研究会 1994 「古代官衙の終末をめぐる諸問題」
- 三好町立歴史資料館編 1988 「文様陶器の流れ」

第1～5回 参考文献

埼玉県 (第1・2回)

- 浦和市立郷土博物館 1976 「浦和市立郷土博物館研究調査報告書」第3集
- 浦和市遺跡調査会 1982 「井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書」
- 浦和市遺跡調査会 1983 「本村山遺跡発掘調査報告書」
- 浦和市遺跡調査会 1985 「大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書」
- 浦和市遺跡調査会 1992 「不動谷2次・駒前南遺跡発掘調査報告書」

- 大宮市遺跡調査会 1987 「A-64号遺跡」
大宮市遺跡調査会 1993 「氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡」
岡部町教育委員会 1979 「水窪遺跡の調査第二次」
岡部町教育委員会 1979 「大寄B・西浦北遺跡」
越生町教育委員会 1986 「越生五領・南原」
加須市遺跡調査会 1982 「花前遺跡」
神川村皂樹原・捨下遺跡調査会 1990 「皂樹原・捨下遺跡II」
上福岡市教育委員会 1978 「川崎遺跡第3次・長宮遺跡」
上福岡市教育委員会 1992 「埋蔵文化財の調査04」
川口市遺跡調査会 1983 「天神山・宮脇遺跡」
川口市遺跡調査会 1985 「上台遺跡群」
川越市教育委員会 1972 「河越越跡遺跡第3次調査概報」
川越市教育委員会 1976 「河越館跡発掘調査報告書」
川越市教育委員会 1989 「鷺光第4遺跡・天王第5遺跡・天王第6遺跡」
川越市教育委員会 1992 「鷺光第5遺跡・光見堂遺跡(第2次)・天王遺跡(第7次)」
川本町教育委員会 1993 「川端遺跡第3次調査報告書」
行田市教育委員会 1983 「旧盛徳寺跡周辺遺跡(1次)小敷田遺跡(2次)」
行田市教育委員会 1988 「瓦塚古墳・下堀玉通遺跡」
熊谷市教育委員会 1982 「中条遺跡群III」
熊谷市教育委員会 1984 「三戸遺跡群上辻・下辻遺跡」
熊谷市教育委員会 1988 「天神遺跡」
児玉町教育委員会 1981 「金屋遺跡群」
児玉町教育委員会 1984 「阿知越遺跡II」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981 「清水谷・安光寺・坂坂」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 「伴六」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 「沼下・平原他7遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「若宮台」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 「台耕地遺跡II」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 「古凍根岸裏」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 「向田・柳現塚・村後」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 「中原後・石御堂」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「立野南・八幡太神南・黒野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「狼貝北・道上・新町口」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「愛宕通遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986・88 「特監塚・古戸戸」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986 「猪の上遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987 「下辻遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987・89・91 「北島遺跡」「北島遺跡(II)」「北島遺跡(III)」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 「鍾乳・砂田前」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 「竹之花・下大塚・円阿弥遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 「宮町遺跡I」「宮町遺跡II」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 「大正寺・大西」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「桑原遺跡」

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「白草II遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「簗沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺戸・尺戸北・大野田」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「稻荷前(A区)」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「新原敷東・本郷前東」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 「上敷免遺跡」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 「水戸土塙の内・林光寺・根切」
埼玉県教育委員会 1973 「岩の上・燐子山」
埼玉県教育委員会 1978 「中郷・精安地・久城前」
埼玉県教育委員会 1978 「古川端」
埼玉県教育委員会 1979 「大山」
埼玉県教育委員会 1979 「雷電下・飯玉東」
埼玉県教育委員会 1980 「甘粕山」
埼玉県教育委員会 1984 「池守・池上」
埼玉県教育委員会 1989 「白山遺跡」
埼玉県遺跡調査会 1973 「批把橋遺跡発掘調査報告書」
埼玉県遺跡調査会 1973 「山田遺跡・相模場遺跡」
埼玉県遺跡調査会 1976 「大御堂檜下・女堀遺跡発掘調査報告」
埼玉県遺跡調査会 1979 「吉岡・東本郷台・上一斗蔵遺跡」
埼玉県遺跡調査会 1980 「ミカ神社前遺跡」
埼玉県遺跡調査会 1982 「宮ノ越遺跡」
坂戸市教育委員会 1981 「勝呂庵寺」
坂戸市教育委員会 1990・91 「坂戸市遺跡発掘調査報告書」第II集 第III集
狹山市教育委員会 1986 「湯熊木遺跡」
狹山市教育委員会 1987 「今客遺跡」
志木市教育委員会 1992 「中道遺跡第12地点・中道遺跡第13地点・田子山遺跡第4地点・田子山遺跡第5地点」
庄和町陣屋遺跡調査会 1986 「陣屋遺跡」
庄和町馬場遺跡調査会 1986 「馬場遺跡」
高岡寺院跡発掘調査会 1978 「高岡寺院跡発掘調査報告書」
玉川村教育委員会 1992 「鎌新田遺跡I-B地点の調査」
鶴ヶ島總教育委員会 1984 「若葉台遺跡群A・B・B地点南」
東電竈原線遺跡調査会 1982 「長塚・富士ノ越・東本郷」
所沢市教育委員会 1982 「東の上遺跡」
所沢市教育委員会 1984 「椿峰遺跡」
所沢市教育委員会 1993 「基本峯遺跡」
戸田市教育委員会 1978 「前谷遺跡発掘調査概要」
蓮田市教育委員会 1987 「ささら遺跡」
蓮田市教育委員会 1989 「椿山遺跡」第3・4次調査
蓮田市教育委員会 1989 「荒川附遺跡等7地点・第8地点・宿下遺跡第6地点」
蓬田市遺跡調査会 1992 「岡手山・馬込八番・宮の前・山の内・八幡浦・荒川附・堂山公園・天神前」
鳩ヶ谷市教育委員会 1984・1990 「鳩ヶ谷市三ツ井遺跡」
日高町教育委員会 1989 「若宮一第7次調査・稻荷・神明」
深谷市教育委員会 1985 「上敷免遺跡(第2次)・上敷免北遺跡」
富士見市教育委員会 1976 「富士見市文化財報告Ⅱ」

- 富士見市教育委員会 1984 「富士見市遺跡群II・IV」
松伏町教育委員会 1990 「本郷遺跡II-1・IV」
美里町遺跡調査会 1983 「白沢・柳町・森浦・向田・向・東宮平・峯・栗山」
美里村畠中遺跡調査会 1979 「畠中遺跡」
美里村教育委員会 1976 「宮下・幡之口遺跡発掘調査概報」
三芳町教育委員会 1988 「町内遺跡群」
毛呂山町教育委員会 1990 「毛呂山町内遺跡発掘調査報告書I」
毛呂山町教育委員会 1983 「伴六遺跡」
薬師堂遺跡調査会 1981 「秩父・薬師堂遺跡'79」
与野市教育委員会 1983 「藏骨器」
六反田遺跡調査会 1981 「六反田」
和光市教育委員会 1990 「市場上遺跡」
早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1993 「大久保山II」
千葉県 (第3回)
我孫子市教育委員会 1979 「新木東台遺跡」
我孫子市教育委員会 1983・84 「我孫子市埋蔵文化財報告第3集・第4集」
我孫子市教育委員会 1985 「大久保遺跡」
我孫子市教育委員会 1986 「西原遺跡・横井城跡」
我孫子市教育委員会 1987 「高根遺跡」
市川市教育委員会 1987 「堀之内」
市川市教育委員会 1980・82・83・84・87・88・89・90・91 (昭和54・56・57・58・61・62・63・平成元・2年度市
川東部遺跡群発掘調査報告)
市川市教育委員会 1986 「下総国分尼寺跡IV」
市原市教育委員会 1968 「南大広遺跡・海保古墳群」
市原市教育委員会 1977 「蛇谷遺跡」
市原市文化財センター 1985 「池ノ谷遺跡・福増遺跡」
市原市文化財センター 1987 「外迎山遺跡・唐沢遺跡」
市原市文化財センター 1987 「白船城跡」
市原市文化財センター 1989 「千草山遺跡・東千草山遺跡」
市原市文化財センター 1989 「市原市文作遺跡」
印旛都市文化財センター 1987 「高峰新山遺跡発掘調査報告書」
印旛都市文化財センター 1987 「天神台遺跡発掘調査報告書」
印旛都市文化財センター 1987 「椎ノ木遺跡」
印旛都市文化財センター 1988 「岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書」
印旛都市文化財センター 1988 「久能遺跡群発掘調査報告書」
印旛都市文化財センター 1990 「ニュー東京国際ゴルフ場造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書(III)」
印旛都市文化財センター 1990 「岡謙台遺跡発掘調査報告書」
印旛都市文化財センター 1991 「和良比遺跡発掘調査報告書(IV)」
馬橋鶴尾調査会 1980 「馬橋鶴尾余遺跡」
大網山田台遺跡調査会 1984 「大網山田台遺跡」
小見川町埋蔵文化財調査会 1989 「坂轔地区遺跡群発掘調査報告書」
柏市教育委員会 1976 「中馬場遺跡第3次発掘調査報告書」
柏市教育委員会 1979 「高野台遺跡発掘調査報告書」

- 上總国分寺台遺跡調査団 1976 「南向原」
香取郡市文化財センター 1991 「長部山遺跡」
鎌ヶ谷市教育委員会 1988 「双賀辻田 №1 遺跡発掘調査報告書」
木更津市教育委員会 1990 「諸西遺跡群発掘調査報告II」
君津都市文化財センター 1985 「永吉台遺跡群」
君津都市文化財センター 1986 「上総線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
君津都市文化財センター 1986 「東郷台遺跡」
君津都市文化財センター 1988 「郡遺跡確認調査報告書」
君津都市文化財センター 1989 「三箇遺跡群」
君津都市文化財センター 1990 「南口遺跡」
君津都市文化財センター 1993 「小浜遺跡群V」
君津都市文化財センター 1993 「飯台遺跡群」
君津都市文化財センター 1993 「花山遺跡」
佐倉市教育委員会 1975 「将門鹿島台」
佐倉市教育委員会 1975・76 「白井南」
佐倉市教育委員会 1978 「佐倉市駅合作遺跡」
佐倉市教育委員会 1979 「江原台」
佐倉市教育委員会 1979 「江原台第1遺跡発掘調査報告4」
佐倉市教育委員会 1983 「岩宮漆谷津・太田宿」
佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985 「大崎台遺跡発掘調査報告」
佐倉市坂戸遺跡調査会 1986 「坂戸遺跡」
佐倉市寺崎遺跡群調査会 1985 「寺崎遺跡群発掘調査報告書」
佐倉市棹作遺跡調査会 1985 「棹作遺跡発掘調査報告」
山武考古学研究所 1984 「駒込遺跡」
山武考古学研究所 1986 「作畠遺跡」
山武考古学研究所 1986 「荒追遺跡群」
山武考古学研究所 1987 「大平遺跡」
山武考古学研究所 1988 「大著向台遺跡」
山武考古学研究所 1990 「小原子遺跡群」
芝山はにわ博物館 1975 「遺跡日吉倉」
下総町教育委員会 1984 「千葉県下総町文化財調査報告書II」
沼南町教育委員会 1984 「六蓋内遺跡」
音生遺跡調査会 1978 「木更津市音生第2遺跡」
菅谷古墳群及び南外論戸遺跡調査会 1985 「東金市菅谷古墳群及び南外論戸遺跡、滝・木浦II遺跡発掘調査報告書」
高宮台遺跡調査会 1985 「高宮台遺跡」
千葉県教育委員会 1978 「佐倉市神田古遺跡」
千葉県教育委員会 1983 「下総町名木庵寺跡確認調査報告書」
千葉県教育委員会 1986 「千葉市小貢土庵寺跡確認調査報告書」
千葉県教育委員会 1990 「八日市場市大寺庵寺跡確認調査報告書」
千葉県都市公社 1973 「京葉」
千葉県都市公社 1973 「小金線」
千葉県都市公社 1974 「八千代市村上遺跡群」
千葉県都市公社 1975 「有吉遺跡(第1次)」

- 千葉県文化財センター 1977・80 「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」
- 千葉県文化財センター 1978 「有吉遺跡(第2次)」
- 千葉県文化財センター 1979 「ムコアラク遺跡」
- 千葉県文化財センター 1979 「椎名崎遺跡」
- 千葉県文化財センター 1983 「千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1984 「八千代市梅現後遺跡」
- 千葉県文化財センター 1984 「花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ」
- 千葉県文化財センター 1985 「花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船」
- 千葉県文化財センター 1985 「千葉市種ヶ谷津遺跡」
- 千葉県文化財センター 1985 「主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」
- 千葉県文化財センター 1985・88 「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅳ」
- 千葉県文化財センター 1985 「大鶴野北遺跡」
- 千葉県文化財センター 1986 「千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1986 「大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群」
- 千葉県文化財センター 1987 「八千代市井戸向遺跡」
- 千葉県文化財センター 1987・91 「主要地方道成田松尾線Ⅴ・VII」
- 千葉県文化財センター 1987 「大井東山遺跡・大井火畑遺跡」
- 千葉県文化財センター 1988 「東金市久我台遺跡」
- 千葉県文化財センター 1988 「成田市堀ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1989 「市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1989 「君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳群発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1980 「千葉市小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡」
- 千葉県文化財センター 1990 「新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書VI」
- 千葉県文化財センター 1990 「下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書」
- 千葉県文化財センター 1990 「高沢遺跡」
- 千葉県文化財センター 1990 「吉原三王遺跡」
- 千葉県文化財センター 1991 「八千代市白幡前遺跡」
- 千葉県文化財センター 1991 「公津原Ⅱ」
- 千葉県文化財センター 1991 「多古町南僧當遺跡」
- 千葉県文化財センター 1992 「東金市井戸ヶ谷遺跡」
- 千葉県文化財センター 1993 「下総町不光寺遺跡」
- 千葉県教育委員会 1976 「芳賀輪遺跡」
- 千葉県教育委員会 1980 「千葉市芳賀輪遺跡第一第7次発掘調査報告書」
- 千葉県教育委員会 1984 「谷津遺跡」
- 千葉県遺跡調査会 1982 「定原遺跡」
- 千葉県遺跡調査会 1986 「仁戸名遺跡」
- 千葉市文化財調査協会 1988 「千葉市餅ヶ崎遺跡」
- 千葉市文化財調査協会 1988 「千葉市砂子遺跡」
- 千葉市文化財調査協会 1988 「千葉市平川遺跡群」
- 千葉市教育委員会 1988 「立木南遺跡」
- 銚子市教育委員会 1987 「長塚十二山遺跡」
- 長生都市文化財センター 1990 「桂遺跡群発掘調査報告書」
- 東金台遺跡調査団 1980 「東金台遺跡！」

- 東庄町教育委員会 1982 「今郡東ノ台遺跡・宮本刑部遺跡」
- 流山市教育委員会 1984・91 「加地区遺跡群II・III」
- 成田市教育委員会 1990 「成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 新山遺跡発掘調査団 1978 「千葉市平山町新山遺跡発掘調査概報」
- 日本文化財研究所 1977 「千葉県获ノ原遺跡」
- 平賀遺跡群遺跡調査会 1985 「平賀」
- 船橋市遺跡調査会 1990 「印内台遺跡—7・8次調査報告書」
- 船橋市遺跡資料刊行会 1982 「遺跡が語る船橋の原始・古代」遺跡シリーズ No.3
- 水郷台遺跡調査団 1979 「本郷台」
- 山田遺跡調査会 1977 「山田水呑遺跡」
- 八日市場市教育委員会 1986 「飯塚遺跡群発掘調査報告書」
- 吉高家老地遺跡調査会 1976 「吉高家老地遺跡」
- 龍角寺ニュータウン遺跡群調査会 1982 「龍角寺ニュータウン遺跡群」
- 早稲田大学出版部 1974 「東閣都多古墳群」
- 栃木県 (第4回)
- 足利市教育委員会 1987 「國府野遺跡第9次調査報告」
- 足利市教育委員会 1990 「平成元年席堀藏文化財発掘調査年報」
- 小山市教育委員会 1982 「乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書」
- 小山市教育委員会 1987 「宮内東遺跡」
- 小山市教育委員会 1990 「八幡根東遺跡発掘調査報告書」
- 上三川町教育委員会 1985 「大町遺跡」
- 上三川町教育委員会 1986 「多功南原遺跡」
- 上三川町教育委員会 1988 「薄市遺跡・大山遺跡」
- 新藤忠・佐野大和・龟井正道・三宅敏之・長峰光一・近藤喜博 1963 「日光男体山山顶遺跡発掘調査報告書」
- 佐野市教育委員会 1989 「館野前遺跡」
- 栃木県教育委員会 1974 「井頭」
- 栃木県教育委員会 1979 「北の内遺跡」
- 栃木県教育委員会 1979 「中村遺跡調査報告書」
- 栃木県教育委員会 1981 「県営備場地内遺跡発掘調査報告書」
- 栃木県教育委員会 1981 「柴工業団地内遺跡調査報告書」
- 栃木県教育委員会 1985~91 「下野国分守跡I~VII」
- 栃木県教育委員会 1986 「下野国府跡寄居地区遺跡」
- 栃木県教育委員会 1990 「溜ノ台遺跡」
- 栃木県教育委員会 1993 「砂田A遺跡」
- 芳賀町教育委員会 1992 「免の内台遺跡」
- 益子町教育委員会 1976 「東台遺跡」
- 茨城県 (第5回)
- 石岡市教育委員会 1985 「鹿の子遺跡発掘調査報告書」
- 茨城県教育財團 1980 「外八代遺跡」
- 茨城県教育財團 1981 「今城遺跡」
- 茨城県教育財團 1982 「鹿の子A遺跡」
- 茨城県教育財團 1983 「鹿の子C遺跡」
- 茨城県教育財團 1989 「奥谷遺跡」

- 茨城県教育財團 1989 「南三島遺跡3・4区」
茨城県教育財團 1989 「柴崎遺跡1区」
茨城県教育財團 1990 「金木場遺跡」
茨城県教育財團 1990 「北郷C遺跡」
茨城県教育財團 1991 「恩川遺跡」
茨城県教育財團 1991 「長峰遺跡」
茨城県教育財團 1992 「岡ノ内遺跡」
茨城県教育財團 1993 「沢橋遺跡」
茨城県教育財團 1994 「うぐいす平遺跡」
茨城県教育財團 1994 「寄居遺跡」
大宮町教育委員会 1985 「常陸源氏平」
笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会 1992 「寺崎台地遺跡」
勝田市文化スポーツ振興公社 1991 「武田IX」
関町教育委員会 1991 「中道遺跡発掘調査報告書」

研究紀要 第11号

1994

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社